

**Oracle® Business Intelligence Tools**

インストレーション・ガイド

10g リリース 2 (10.1.2.1) for Microsoft Windows

部品番号 : B25092-01

2005 年 9 月

Oracle Business Intelligence Tools インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.1.2.1)  
for Microsoft Windows

部品番号 : B25092-01

原本名 : Oracle Business Intelligence Tools Installation Guide, 10g Release 2 (10.1.2.1) for Microsoft Windows

原本部品番号 : B19294-01

Copyright © 2005 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

---

---

# 目次

はじめに .....	v
対象読者 .....	vi
ドキュメントのアクセシビリティ .....	vi
関連ドキュメント .....	vii
表記規則 .....	vii
サポートおよびサービス .....	vii
<b>1 Oracle Business Intelligence Tools の一般要件</b>	
1.1 Oracle Business Intelligence Tools .....	1-2
1.1.1 OracleBI Spreadsheet Add-In .....	1-2
1.1.2 OracleBI Discoverer Administrator .....	1-2
1.1.3 OracleBI Beans .....	1-3
1.1.4 Oracle Reports Developer .....	1-3
1.1.5 OracleBI Discoverer Desktop .....	1-3
1.1.6 OracleBI Warehouse Builder (Oracle Business Intelligence Tools インストールとは別の インストール) .....	1-3
1.2 Oracle Business Intelligence Tools のインストールの概要 .....	1-4
1.3 ハードウェア要件 .....	1-5
1.4 動作環境および必要なパッチ .....	1-6
1.5 データベース要件 .....	1-7
1.5.1 最新の OLAP パッチのダウンロード .....	1-7
1.6 必要なソフトウェア .....	1-8
1.6.1 BI Beans のみ : Oracle JDeveloper .....	1-8
1.6.2 Spreadsheet Add-In のみ : Microsoft Excel .....	1-8
1.7 1 つの Oracle ホーム・ディレクトリでの共存 .....	1-8
1.7.1 Oracle ホームに関する考慮事項 .....	1-8
1.7.2 Oracle Business Intelligence Tools の複数インストールの実行 .....	1-9
1.7.3 Oracle Business Intelligence Tools インストールおよび Oracle Database .....	1-9
1.8 インストール前の作業 .....	1-10
1.8.1 一般的なチェックリスト .....	1-10
1.8.2 ロケールの設定 .....	1-10
1.8.3 インストール時のアシスティブ・テクノロジーおよび Java Access Bridge の使用 (Windows のみ) .....	1-10
1.8.4 コンポーネント固有のインストール前の作業 .....	1-10
1.8.4.1 Spreadsheet Add-In .....	1-10
1.8.4.2 Discoverer Administrator .....	1-11

1.8.4.3	OracleBI Beans .....	1-11
1.8.4.4	Discoverer Desktop .....	1-11
1.8.4.5	Reports Developer .....	1-11
1.9	インストーラ .....	1-12
1.9.1	インストール時に必要な情報 .....	1-12
1.9.2	Windows システム・ファイルのインストール .....	1-12

## 2 Oracle Business Intelligence Tools のインストール

2.1	リリース・ノートの内容の把握 .....	2-2
2.2	Oracle Business Intelligence Tools のインストール .....	2-2
2.3	インストール後の一般的な作業 .....	2-4
2.3.1	OracleBI Discoverer と tnsnames.ora .....	2-4
2.3.2	OracleBI Discoverer と NLS_LANG .....	2-4
2.3.3	追加フォント .....	2-5
2.3.4	インストール後の Oracle Business Intelligence Tools でのアシスティブ・テクノロジーと Java Access Bridge の使用 (Windows のみ) .....	2-5
2.4	コンポーネント固有のインストール後の作業 .....	2-6
2.4.1	Spreadsheet Add-In .....	2-6
2.4.2	Discoverer Administrator .....	2-6
2.4.3	BI Beans .....	2-6
2.4.3.1	データベースに関する考慮事項 .....	2-6
2.4.3.2	その他の作業 .....	2-8
2.4.4	Discoverer Desktop .....	2-8
2.5	コンポーネントの起動 .....	2-8
2.5.1	Spreadsheet Add-In .....	2-9
2.5.2	Discoverer Administrator .....	2-9
2.5.3	BI Beans (および Oracle JDeveloper) .....	2-9
2.5.4	Discoverer Desktop .....	2-10
2.5.5	Oracle Reports Developer .....	2-10
2.6	ユーザー・ドキュメントへのアクセス .....	2-10
2.7	次の作業 .....	2-11

## 3 Oracle Business Intelligence Tools のアンインストールおよび再インストール

3.1	Oracle Business Intelligence Tools のアンインストール .....	3-2
3.2	Oracle Business Intelligence Tools の再インストール .....	3-3

## A トラブルシューティング

A.1	開始する前に .....	A-2
A.1.1	ハードウェア要件およびインストール前の要件の確認 .....	A-2
A.1.2	リリース・ノートの内容の把握 .....	A-2
A.2	インストールのトラブルシューティング .....	A-3
A.2.1	Oracle Business Intelligence Tools のインストール .....	A-3
A.2.2	Oracle Business Intelligence Discoverer をインストールするためのインストール・タイプの 選択 .....	A-4
A.2.3	Oracle Business Intelligence Discoverer インストール後の Discoverer End User Layer (EUL) のアップグレード .....	A-4

## B 既存の BI Beans プロジェクトの移行

B.1	Oracle OLAP インスタンスの移行 (オプション) .....	B-2
B.2	BI Beans カタログの移行 .....	B-2
B.2.1	Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 に移行するための付加的手順 .....	B-2
B.3	旧リリースからのユーザー設定の移行 .....	B-3
B.4	BI Beans ワークスペースの移行 .....	B-3
B.4.1	BI Beans JSP アプリケーションの手動移行手順 .....	B-4
B.4.1.1	ネームスペースの更新 .....	B-4
B.4.1.2	新規 BI JSP タグ機能へのアクセス .....	B-4
B.4.1.3	<body> タグの更新 .....	B-5
B.4.1.4	プレゼンテーションにアクセスしたコードの更新 .....	B-5
B.4.1.5	SaveButton JSP タグの更新 .....	B-6
B.4.2	BI Beans UIX アプリケーションの手動移行手順 .....	B-6
B.4.2.1	イメージのパスの更新 .....	B-6
B.4.2.2	エラー・ページの更新 .....	B-7
B.4.2.3	部分ページ・レンダリングの要素の追加 .....	B-7
B.4.2.4	dialogLinkDef 要素ごとのコードの追加 .....	B-7
B.4.2.5	プレゼンテーションにアクセスしたコードの更新 .....	B-8
B.4.2.6	SaveDef UIX タグの更新 .....	B-8
B.4.3	BI Beans Java クライアント・クラス・アプリケーションの手動移行手順 .....	B-8
B.4.3.1	グラフのコード変更 .....	B-8
B.4.4	BI Beans Java サブレット・アプリケーションの手動移行手順 .....	B-9
B.4.4.1	サブレット・アプリケーションの Cabo ディレクトリ内のインストール可能ファイルの更新 .....	B-9
B.4.4.2	サブレット・アプリケーションのサンプルの参照 .....	B-9
B.5	BI Beans カタログ移行後の作業 (オプション) .....	B-10
B.5.1	カタログの移行後作業にメリットが得られる条件 .....	B-10
B.5.2	メッセージ BIB-9549 が表示される理由 .....	B-10
B.5.3	移行後作業 .....	B-10

## C 非対話型インストールとサイレント・インストール

C.1	非対話型インストール .....	C-2
C.2	サイレント・インストール .....	C-2
C.3	インストール前 .....	C-2
C.4	レスポンス・ファイルの作成 .....	C-3
C.4.1	レスポンス・ファイルの例 .....	C-3
C.5	インストールの開始 .....	C-4
C.6	インストール後 .....	C-4
C.7	サイレント・アンインストール .....	C-4

## D Java Access Bridge のインストール

D.1	Java Access Bridge の概要 .....	D-2
D.2	インストール済 Oracle コンポーネントで使用するための Java Access Bridge の設定 .....	D-2
D.2.1	Java Access Bridge のインストール .....	D-2
D.2.2	Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成 .....	D-3
D.2.2.1	Windows 2000、Windows XP または Windows Server 2003 用の構成 .....	D-3

## 索引



---

---

# はじめに

この章の項目は次のとおりです。

- [対象読者](#)
- [ドキュメントのアクセシビリティ](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)
- [サポートおよびサービス](#)

## 対象読者

Oracle Business Intelligence Tools は、BI アプリケーションを開発および使用するための包括的な製品セットです。このマニュアルでは、Oracle Developer Suite に付属のスタンドアロン型 Oracle Business Intelligence Tools の CD-ROM から Oracle Business Intelligence Tools のコンポーネントをインストールする方法について説明します。

このインストール手順は、ハードウェアおよびソフトウェアの構成や Oracle Business Intelligence Tools でインストールする製品のバリエーションにあわせて変更できます。この製品のインストールおよび使用に関する最新の追加情報は、『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』を参照してください。

このマニュアルは、次のような Oracle Business Intelligence Tools の各種コンポーネントのインストールおよび構成担当者を対象としています。

- ビジネス・ユーザー
- Business Intelligence アプリケーション開発者
- ウェアハウス管理者
- システム管理者
- その他の MIS 担当者

ユーザーは、システム管理操作に慣れていることを前提としています。

## ドキュメントのアクセシビリティ

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。アクセシビリティの標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility> を参照してください。

### ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

一部のスクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし一部のスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

### 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

## 関連ドキュメント

このマニュアルで言及されているドキュメント、および Oracle Business Intelligence Tools に関するその他の情報（ホワイト・ペーパー、ベスト・プラクティス、最新版のドキュメントなど）には、次の URL の Oracle Technology Network からアクセスできます。

<http://www.oracle.com/technology>

## 表記規則

このマニュアルの本文では、次の表記規則が使用されます。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連するグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素、または本文や用語集で定義されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル・コード、画面上に表示されるテキストまたはユーザーが入力するテキストを示します。
[]	大カッコで囲まれたテキストは、ユーザーが選択可能な（または選択しなくてもよい）オプション句を示します。

## サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

### オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

### 製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

### 研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

### その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

---

**注意：** ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

---



---

# Oracle Business Intelligence Tools の 一般要件

この章では、インストール・コンポーネントおよびインストール・プロセスについて詳しく説明します。この章の項目は次のとおりです。

- 1.1 項「Oracle Business Intelligence Tools」
- 1.2 項「Oracle Business Intelligence Tools のインストールの概要」
- 1.3 項「ハードウェア要件」
- 1.4 項「動作環境および必要なパッチ」
- 1.5 項「データベース要件」
- 1.6 項「必要なソフトウェア」
- 1.7 項「1 つの Oracle ホーム・ディレクトリでの共存」
- 1.8 項「インストール前の作業」
- 1.9 項「インストーラ」

## 1.1 Oracle Business Intelligence Tools

Oracle Business Intelligence Tools では、ユーザーはデータの管理、カスタム・アプリケーションの開発、およびスプレッドシートへのデータの組込みを行うことができます。管理者は、Oracle Business Intelligence で使用するリレーショナル・データソースを効率的に準備できます。開発者は、マルチディメンション (OLAP) データソースに対して使用するカスタム・アプリケーションを短時間で開発できます。ビジネス・ユーザーは、Microsoft Excel のスプレッドシートでマルチディメンション・データに直接アクセスできるようになります。Oracle Business Intelligence Tools を使用することにより、組織が業務、顧客およびサプライヤを適時正確に把握して収益性を高めることのできるシステムが実現します。

包括的なビジネス・インテリジェンス・ソリューションである Oracle Business Intelligence Tools は、次のコンポーネントで構成されています。

- [OracleBI Spreadsheet Add-In](#)
- [OracleBI Discoverer Administrator](#)
- [OracleBI Beans](#)
- [Oracle Reports Developer](#)
- [OracleBI Discoverer Desktop](#)
- [OracleBI Warehouse Builder](#) (Oracle Business Intelligence Tools インストールとは別のインストール)

### 1.1.1 OracleBI Spreadsheet Add-In

OracleBI Spreadsheet Add-In を使用すると、Microsoft Excel で Oracle OLAP データを処理できるようになります。ウィザードを使用して OLAP クエリーを作成できます。また、Excel で直接ページングやドリル操作を行うことによるデータの移動、ウィザードを使用した OLAP ベースの計算の作成、使い慣れた Excel ベースの計算式や関数を使用したデータの拡張、グラフの作成、およびその他の Excel 標準機能の Oracle データでの使用が可能です。

### 1.1.2 OracleBI Discoverer Administrator

OracleBI Discoverer Administrator は、リレーショナル型の Discoverer ソリューションのデータベースを管理するための管理ツールです。リレーショナル・データソースに対し、OLAP オプションなしで Discoverer を使用する場合は、Discoverer Administrator を使用して、技術系以外のビジネス・ユーザー用の Discoverer End User Layer (EUL: データベース名、結合およびその他の技術的な詳細情報を抽象化するセマンティック・レイヤー) を作成および管理します。

また、Discoverer Administrator では、ユーザー権限やアクセス権限によってレポート環境のセキュリティを保護することもできます。Discoverer Administrator は、使用するデータベースや Oracle Applications 固有のセキュリティを利用して、そのセキュリティ・ポリシーに自動的に従うため、ユーザーやアクセス権限の定義を 2 度行う必要はありません。

### 1.1.3 OracleBI Beans

OracleBI Beans は、Oracle テクノロジ・プラットフォームを利用するビジネス・インテリジェンス・アプリケーションを短時間で開発できるようにする標準ベースの JavaBeans™ のセットです。BI Beans は、開発者の生産性向上、分析力の向上、強力なレポートの作成、およびユーザー間の情報共有を実現する、セキュリティと拡張性に優れたプラットフォームを提供します。BI Beans アプリケーションは、情報を参照する一般ユーザーと完全な非定型クエリーおよび分析機能を必要とするハイエンド・ユーザーの両方に対して、Oracle Database の高度な分析機能を提供します。

開発者やビジネス・ユーザーが Oracle Database の埋込み OLAP エンジンの分析機能を利用できるように、BI Beans には Query Builder と Calculation Builder という 2 つのツールが用意されています。Query Builder では、「売上成長率に基づいた上位 5 商品」や「得意先に対するこれら商品の販売状況」などのビジネス用語を使用して、データベース・クエリーを表すことができます。Calculation Builder では、テンプレート方式のウィザードを使用して、売上予想額と実際の売上額に基づいた売上変動率など、分析用の新しいビジネス・インジケータを定義できます。

BI Beans は Oracle JDeveloper とも統合されているため、Web アプリケーションを短時間で容易にビルドできます。この統合により一連のウィザード、JSP タグおよび UIX タグが提供され、コードを記述せずにビジュアル・アプリケーションによるカスタム BI アプリケーションを短時間で開発できます。

### 1.1.4 Oracle Reports Developer

Oracle Reports Developer は、レポート作成コンポーネント (Oracle Business Intelligence Tools のコンポーネント) であり、任意のデータソース (Oracle データベース、JDBC、XML、テキスト・ファイルおよび Oracle OLAP など) に対して洗練された Web レポートおよびレポート出力を短時間で開発して配布できるようにする強力なエンタープライズ・レポート・ツールです。Oracle Reports Developer は JSP や XML のような最新の J2EE テクノロジを利用することで、様々なフォーマット (HTML、XML、PDF、デリミタ付きテキスト、PostScript、PCL および RTF など) のレポートを拡張可能で効率的な方法で任意の宛先 (電子メール、Web ブラウザ、OracleAS Portal およびファイル・システムなど) に公開できるようにします。

### 1.1.5 OracleBI Discoverer Desktop

OracleBI Discoverer Desktop は、Web ベースの Oracle Discoverer Plus のかわりに使用できる、Discoverer ワークブックを作成するためのクライアント / サーバー・コンポーネントです。Discoverer Plus と同様に、Discoverer Desktop も非定型のクエリー、分析およびレポート作成を行うためのビジネス・ユーザー向けツールです。これは、データの選択、ワークシートのフォーマット、Oracle Database の数値および統計分析機能を利用するためのツールと同じです。

### 1.1.6 OracleBI Warehouse Builder (Oracle Business Intelligence Tools インストールとは別のインストール)

OracleBI Warehouse Builder は Oracle Business Intelligence Tools のコンポーネントですが、Oracle Business Intelligence Tools とは別にインストールします。

OracleBI Warehouse Builder は、企業のデータ・ウェアハウス、データ・マートおよびビジネス・インテリジェンス・アプリケーションの設計とデプロイを行うための統合ソリューションを提供するビジネス・インテリジェンス・ツールです。このツールを使用すると、分散されたデータソースやターゲット間でのデータ統合を容易に行うことができます。さらに、Warehouse Builder には、開発するシステムのライフ・サイクルを管理するのに必要な機能がすべて揃っています。

## 1.2 Oracle Business Intelligence Tools のインストールの概要

Oracle Business Intelligence Tools のインストールでは、ユーザー・ロールに基づいたインストール・プロファイルが用意されています。選択したロールによって、デフォルトでインストールされるコンポーネントの組合せが提示されますが、カスタム・インストールを選択し、必要なコンポーネントの組合せを自由に指定することも可能です。

- **ビジネス・ユーザー**: ビジネス・ユーザー向けの分析機能とレポート機能が提供されるオプションです。このオプションでは、[OracleBI Spreadsheet Add-In](#) がインストールされます。
- **管理者 / パワー・ユーザー**: 技術レベルの高いユーザー向けの End User Layer (EUL) 管理機能が提供されるオプションです。このオプションでは、[OracleBI Discoverer Administrator](#) がインストールされます。
- **開発者**: BI アプリケーションを開発するユーザー向けのツールがインストールされるオプションです。このオプションでは、[OracleBI Beans](#) および [Oracle Reports Developer](#) がインストールされます。

表 1-1 に、各ロールでインストールされる Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントを示します。

**表 1-1 Oracle Business Intelligence Tools インストール・オプションおよびコンポーネント (Windows)**

コンポーネント	ビジネス・ユーザー	パワー・ユーザー	BI 開発者	カスタム・インストール
Spreadsheet Add-In	はい	いいえ	いいえ	任意
Discoverer Administrator	いいえ	はい	いいえ	任意
OracleBI Beans (Oracle JDeveloper の インストールが必要)	いいえ	いいえ	はい	任意
Discoverer Desktop	いいえ	いいえ	いいえ	任意
Oracle Reports Developer	いいえ	いいえ	はい	任意

## 1.3 ハードウェア要件

表 1-2 に、Oracle Business Intelligence Tools の基本的なハードウェア要件を示します。

表 1-2 Oracle Business Intelligence Tools ハードウェア要件

ハードウェア・アイテム	要件
CPU	Pentium または互換プロセッサ (300 MHz 推奨)
メモリー	256MB <sup>1</sup>
ディスク容量	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ビジネス・ユーザー向けのインストール</b>: Spreadsheet Add-In が含まれ、342 MB のディスク容量を必要とします。</li> <li>■ <b>管理者 / パワー・ユーザー向けのインストール</b>: Discoverer Administrator が含まれ、343 MB のディスク容量を必要とします。</li> <li>■ <b>開発者向けのインストール</b>: BI Beans が含まれ、101 MB のディスク容量を必要とします。</li> <li>■ <b>カスタム・インストール</b>: コンポーネントを自由に組み合わせることができます。全製品を含めると合計 547 MB のディスク容量が必要となります。Discoverer Desktop は単独で 482 MB 必要です。</li> </ul>
合計ページファイル・サイズ またはスワップ領域	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Windows: 1535 MB</li> </ul>
TMP サイズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Windows: 150 MB (256 MB 推奨)</li> </ul>
ビデオ	コンピュータに少なくとも 256 色の表示機能が必要です。

<sup>1</sup> インストールに必要な最小メモリー。これは、すべての Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントの最小メモリーではありません。各コンポーネントのメモリー要件は、表 1-3 を参照してください。

表 1-3 に、各 Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントのメモリー要件を示します。

表 1-3 Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントのメモリー要件

コンポーネント	メモリー
Spreadsheet Add-In	287 MB
Discoverer Administrator	384 MB
BI Beans (Oracle JDeveloper を含む)	91 MB
Reports Developer	256 MB
Discoverer Desktop	128 MB

## 1.4 動作環境および必要なパッチ

BI Beans は、Microsoft Windows 2000/XP/2003、Sun Solaris、HP PA-RISC HP-UX（64 ビット）および Linux x86 の各動作環境に対応しています。このマニュアルでは、Windows で BI Beans をインストールする方法についてのみ扱います。その他のプラットフォーム上での BI Beans に関するドキュメントは、次の URL からダウンロードできます。

<http://www.oracle.com/technology>

Spreadsheet Add-In および Discoverer Administrator は、Microsoft Windows 2000/XP/2003 の動作環境にのみ対応しています。

Discoverer Desktop は、Microsoft Windows 2000 および XP の動作環境にのみ対応しています。Windows 2003 ではサポートされません。

Reports Developer は、Microsoft Windows 2000、XP、Solaris、Linux および HP-UX の動作環境にのみ対応しています。Windows 2003 ではサポートされません。

表 1-4 に、Oracle Business Intelligence Tools に対する Windows 動作環境のソフトウェア要件を示します。

**表 1-4 Oracle Business Intelligence Tools Windows のソフトウェア要件**

ソフトウェア・アイテム	要件
Windows の動作環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Microsoft Windows 2000（Service Pack 3）以降</li> <li>■ Microsoft Windows XP Professional Edition（Service Pack 1）以降</li> <li>■ Microsoft Windows 2003（32 ビット）</li> </ul>

---

**注意：** 比較的新しいバージョンの Windows では、C 以外のシステム・ドライブを使用できます。このマニュアルでは、システム・ドライブを「システムのデフォルト・ドライブ」と呼びます。システムのデフォルト・ドライブには C 以外のドライブも使用できますが、このマニュアルのほとんどの例では、システムのデフォルト・ドライブとして C を使用しています。

---

## 1.5 データベース要件

Oracle Business Intelligence Tools 10.1.2.1 は、次のデータベース・バージョンでサポートされています。

- Oracle9i リリース 2 データベース (9.2.0.6 以上)
- Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.4 以上)
- Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 (10.2.0.1 以上)、公認予定

サポートされているバージョンに関する最新情報は、<http://metalink.oracle.com> の「Certify」アプリケーション・ページで入手できます。

考慮事項の詳細は、1.5.1 項「最新の OLAP パッチのダウンロード」および 1.7.3 項「Oracle Business Intelligence Tools インストールおよび Oracle Database」を参照してください。

**BI Beans または Spreadsheet Add-In のみ:** BI Beans または Spreadsheet Add-In を Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントの 1 つとしてインストールする場合は、Oracle Database の特定のリリースおよびパッチのみがサポートされます。どちらのコンポーネントの場合も、Oracle Database 要件は同じです。これらのコンポーネントに必要な Oracle Database のサポート対象バージョンの詳細は、1.8.4.1 項「Spreadsheet Add-In」または 1.8.4.3 項「Oracle BI Beans」を参照してください。

### 1.5.1 最新の OLAP パッチのダウンロード

マルチディメンション・データソースのクエリー時には、特定のデータベース・リリースとパッチのみがサポートされます。次の手順に従って、最新の OLAP パッチが適用済かどうかを確認してください。

最新の OLAP パッチにアクセスする手順は、次のとおりです。

1. <http://metalink.oracle.com> で、Oracle Metalink にログインします。
2. 「Patch」をクリックします。
3. 「Advanced Search」をクリックします。
4. 「Advanced Search」画面で、次のフィールドに入力します。
  - **Product or Product Family:** 「Search」アイコンをクリックし、「Search in」フィールドから「Database & Tools」を選択します。「View All」をクリックします。検索結果リストから **Oracle OLAP** をクリックします。
  - **Release:** ドロップダウン・リストから適切なリリース番号を選択します。
  - **Patch Type:** 「Any」を選択します。
  - **Platform or Language:** ユーザーの環境で使用しているプラットフォームを選択します。
  - 残りのフィールドは空白のままにします。

「Go」をクリックすると、パッチ・リストが表示されます。OLAP パッチは、パッチ名に「OLAP」という文字が含まれています。

## 1.6 必要なソフトウェア

この項では、Oracle Business Intelligence Tools およびそのコンポーネントのソフトウェア前提条件について説明します。

### 1.6.1 BI Beans のみ : Oracle JDeveloper

BI Beans をインストールする場合は、同じコンピュータ上に Oracle JDeveloper 10g (10.1.2.1) をインストールする必要があります。BI Beans のインストール時には、JDeveloper のルート・ディレクトリのパスを指定する必要があります。これを指定しないと、インストーラを使用しても BI Beans がインストールされません。BI Beans の前提条件となる Oracle JDeveloper の詳細は、[1.8.4.3.1 項「Oracle JDeveloper」](#) を参照してください。

### 1.6.2 Spreadsheet Add-In のみ : Microsoft Excel

Spreadsheet Add-In をインストールする場合は、同じコンピュータ上に Microsoft Excel をインストールする必要があります。この前提条件の詳細は、[1.8.4.1 項「Spreadsheet Add-In」](#) を参照してください。

## 1.7 1 つの Oracle ホーム・ディレクトリでの共存

この項では、1 つの Oracle ホーム・ディレクトリでの Oracle 製品の共存、および 1 台のコンピュータに複数の Oracle 製品をインストールする際のガイドラインについて説明します。

### 1.7.1 Oracle ホームに関する考慮事項

Oracle ホームは、Oracle ソフトウェアのインストール先となる最上位ディレクトリです。一部の Oracle 製品をそれぞれの Oracle ホームにインストールし、その他の Oracle 製品を同一の Oracle ホームにまとめてインストールすることも可能です。

Oracle Business Intelligence Tools は、次の Oracle ホームにのみインストールできます。

- 新しい個別の Oracle ホーム
- 既存の標準 Oracle Application Server 10.1.2 中間層の Oracle ホーム
- 既存の Oracle Business Intelligence 10g リリース 2 (10.1.2.1) の Oracle ホーム。Oracle Business Intelligence と Oracle Business Intelligence Tools を、同じコンピュータ上で別々の Oracle ホームにインストールすることもできます。

このマニュアルでは、ディレクトリ・パスにプレースホルダ・テキスト `DB_ORACLE_HOME` が含まれている場合があります。このテキストは、Oracle Database のインストール用に選択した Oracle ホーム・ディレクトリまでのパスを表しています。同様に、プレースホルダ・テキスト `BIT_ORACLE_HOME` は、Oracle Business Intelligence Tools のインストール先となる Oracle ホーム・ディレクトリを表しています。

---

---

**注意：** Oracle Business Intelligence Tools 10g リリース 2 (10.1.2.1) および Oracle Application Server 10g (9.0.4) を同じ Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする場合は、`BIT_ORACLE_HOME¥j2ee¥home` からポート 8888 で Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) を起動しないでください。これを行うと、OC4J のインスタンスが失敗します。

---

---

## 1.7.2 Oracle Business Intelligence Tools の複数インストールの実行

次のガイドラインは、同じコンピュータ上に Oracle Business Intelligence Tools 10g リリース 2 (10.1.2.1) の複数インスタンスをインストールする場合に該当します。また、Oracle Developer Suite がすでにインストールされているコンピュータ上に Oracle Business Intelligence Tools 10g リリース 2 (10.1.2.1) をインストールする場合にも当てはまります。

- 最初に Oracle Business Intelligence Tools をインストールした後、必ずコンピュータを再起動してください。
- 必要なインストールをすべて処理できるだけの十分なディスク容量があることを確認してください。必要なディスク容量を確認するには、表 1-2 を参照してください。
- 2 回目以降のインスタンスは、前のインスタンスとは異なる Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。
- Windows のみ: 最後のインストールが完了した後、コンピュータを再起動してください。

## 1.7.3 Oracle Business Intelligence Tools インストールおよび Oracle Database

---

---

**注意:** Oracle Business Intelligence Tools と Oracle データベースで同じ Oracle ホームを共有することはできません。

---

---

Oracle Business Intelligence Tools をインストールする際に、同じコンピュータ上に Oracle Database のインスタンスがすでにインストールされているか、またはインストールする予定がある場合は、次のガイドラインに従ってください。

- 両方のインストールを処理できるだけの十分なディスク容量があることを確認してください。必要な合計ディスク容量を確認するには、特定の Oracle Database のインストール・ガイドおよびこのマニュアルの表 1-2 を参照してください。
- Windows のみ: Oracle Database をまだインストールしていない場合は、まずインストールし、データベースのインストールが完了した後にコンピュータを再起動してください。その後、Oracle Business Intelligence Tools をインストールできます。
- Oracle Business Intelligence Tools は、Oracle Database とは異なる Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。
- Windows のみ: Oracle Business Intelligence Tools のインストールが完了した後、コンピュータを再起動してください。

## 1.8 インストール前の作業

Oracle Business Intelligence Tools をインストールする前に、『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』を確認してください。最新のリリース・ノートは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/products/bi>) で入手できます。

Oracle Business Intelligence Tools のインストール前の作業は次のとおりです。

- 一般的なチェックリスト
- ロケールの設定
- インストール時のアシスティブ・テクノロジーおよび Java Access Bridge の使用 (Windows のみ)
- コンポーネント固有のインストール前の作業

### 1.8.1 一般的なチェックリスト

- Windows 2000 または XP Professional を使用している場合は、管理者グループのメンバーとしてコンピュータにログオンしていることを確認してください。
- すべての Oracle サービスまたは Oracle プロセスを終了し、開いているアプリケーションをすべて閉じてください。

### 1.8.2 ロケールの設定

インストーラのユーザー・インタフェース言語は Java Virtual Machine (JVM) のロケールの設定に基づいており、このロケールはオペレーティング・システム環境のロケールに基づいています。特定のロケールでインストーラを実行するには、インストーラを起動する前に、オペレーティング・システム環境のロケールを設定します。

設定したロケールが使用できない場合、インストーラは英語で表示されます。

### 1.8.3 インストール時のアシスティブ・テクノロジーおよび Java Access Bridge の使用 (Windows のみ)

Java ベースのアプリケーションやアプレットと連動するスクリーン・リーダーなどのアシスティブ・テクノロジーを使用する場合は、Oracle Business Intelligence のインストールを開始する前に、D.2 項「インストール済 Oracle コンポーネントで使用するための Java Access Bridge の設定」の指示に従ってアシスティブ・テクノロジー・プログラムを再起動してください。

### 1.8.4 コンポーネント固有のインストール前の作業

インストールする予定のコンポーネント製品ごとに、次の作業を完了してください。インストール前の補足説明は、『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』を参照してください。

#### 1.8.4.1 Spreadsheet Add-In

Spreadsheet Add-In では、アドインをインストールする前に、コンピュータに Microsoft Excel をインストールしておく必要があります。また、このアドインでは、Oracle Database の特定のリリースおよびパッチもサポートされています。

**1.8.4.1.1 Microsoft Excel** Oracle OLAP Spreadsheet Add-In をインストールするには、Microsoft Excel バージョン 2000、XP または 2003 をコンピュータにインストールしておく必要があります。

**1.8.4.1.2 Oracle Database Spreadsheet Add-In** では、Oracle Database に格納されているデータがサポートされます。ただし、サポート対象となるのは特定のリリースおよびパッチのみです。データベースおよび必要なパッチのインストールは、コンポーネントのインストール前とインストール後のどちらに行っても構いません。インストール後の作業に関する説明は、[2.4.3.1 項「データベースに関する考慮事項」](#)を参照してください。

### 1.8.4.2 Discoverer Administrator

Discoverer Administrator に固有の、インストール前の要件はありません。

### 1.8.4.3 OracleBI Beans

OracleBI Beans には Oracle JDeveloper の拡張機能が備わっているため、BI Beans をインストールする前に、コンピュータに JDeveloper をインストールする必要があります。BI Beans では、Oracle Database の特定のリリースおよびパッチがサポートされています。

**1.8.4.3.1 Oracle JDeveloper** BI Beans には Oracle JDeveloper の拡張機能が備わっています。BI Beans をインストールする前に、Oracle Technology Network (<http://oracle.com/technology/products/jdev>) から Oracle JDeveloper をダウンロードしてコンピュータにインストールする必要があります。詳細は、『Oracle JDeveloper インストール・ガイド』を参照してください。このマニュアルは、Oracle Technology Network 上で他の JDeveloper ドキュメントとともに提供されています。

BI Beans をインストールするには、インストーラによって JDeveloper の場所を尋ねられます。JDeveloper がコンピュータにインストールされていないと、BI Beans はインストールされません。

**1.8.4.3.2 Oracle Database** BI Beans では、Oracle Database に格納されているデータがサポートされます。ただし、サポート対象となるのは特定のリリースおよびパッチのみです。データベースおよび必要なパッチのインストールは、コンポーネントのインストール前とインストール後のどちらに行っても構いません。インストール後の作業に関する説明は、[2.4.3.1 項「データベースに関する考慮事項」](#)を参照してください。

### 1.8.4.4 Discoverer Desktop

Discoverer Desktop に固有の、インストール前の要件はありません。

### 1.8.4.5 Reports Developer

Reports Developer に固有の、インストール前の要件はありません。ただし、「開発者」インストール・オプションを選択した場合は、[1.8.4.3 項「OracleBI Beans」](#)を参照してください。または、「カスタム」インストール・オプションを選択し、前提条件なしで Reports Developer をインストールすることもできます。

## 1.9 インストーラ

Oracle Business Intelligence Tools では、Oracle Universal Installer（このマニュアルでは「インストーラ」と呼ばれる）を使用して、コンポーネントのインストールや環境変数の設定を行います。インストーラを使用すると、ステップ形式でインストール・プロセスを進めることができます。

### 1.9.1 インストール時に必要な情報

インストーラでは、各画面の指示に従ってインストール・プロセスを進めていきます。表 1-5 に、動作環境や選択したインストール・オプションに応じて必要となる情報を示します。

表 1-5 インストール時に必要な情報

アイテム	インストール・タイプ	例
Oracle Business Intelligence Tools 用の Oracle ホームの名前およびパス <sup>1</sup>	すべて	名前: BIToolsHome パス: C:¥BIToolsHome
Oracle JDeveloper のルート・ディレクトリ (JDeveloper の実行可能ファイルの場所ではなく、JDeveloper のインストール先ディレクトリ)	OracleBI Beans (開発者ロールの一部またはカスタム・インストールの一部として使用可能)	パス: C:¥DSHome¥JDev10g
送信メール・サーバー情報の指定	この情報は、BI Beans および Reports Developer のインストールを選択した場合にのみ尋ねられます (開発者ロールの一部またはカスタム・インストールの一部として使用可能)。	mymail.company.com

<sup>1</sup> 詳細は、1.7.1 項「Oracle ホームに関する考慮事項」を参照してください。

### 1.9.2 Windows システム・ファイルのインストール

Oracle Business Intelligence Tools では、いくつかのファイルが Windows システム・ディレクトリ内に存在する必要があります。Oracle Business Intelligence Tools のインストール時には、コンピュータ上の既存のファイルが検証され、Oracle Business Intelligence Tools の要件に従っているかどうか確認されます。ファイルが存在しない場合や、存在しても日付が古い場合は、インストーラによって必要なファイルがインストールされます。

インストール時に、日付の古いファイルを別のプロセスが使用している場合は、インストーラが停止し、エラー・ダイアログが表示されます。これは、Windows を再起動して、更新ファイルを有効にする必要があるためです。インストーラの停止と、システム再起動後のインストーラの再起動は自動的に行われません。

Oracle Business Intelligence Tools には、必要な Windows システム・ファイル用の補足インストールが含まれています。このインストールでは、完了時に必要に応じてコンピュータが自動的に再起動されます。

Oracle Business Intelligence Tools のインストール中に Windows システム・ファイルのエラーが検出された場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログを閉じた後、次の説明に従って Windows システム・ファイルのインストールを開始してください。Windows システム・ファイルのインストールを実行しないと、Oracle Business Intelligence Tools のインストールを続行することはできません。

**Windows システム・ファイルのインストールを開始する手順は、次のとおりです。**

1. 「終了」をクリックして、インストーラを終了します。
2. CD-ROM のルート・ディレクトリ、または DVD のルート・ディレクトリ下にある ¥bi ディレクトリに変更します。

3. `wsf.exe` を実行します。

Windows システム・ファイルのインストーラを制御するスクリプトは、既存の Oracle ホームを検出しようとします。インストーラで Oracle ホームが検出されない場合は、「**ファイルの場所**」ダイアログが表示されます。ダイアログから Oracle ホームを選択してください。

再起動が必要な場合は、Windows が自動的に再起動されます。そうでない場合は、インストール完了ダイアログが表示されずに、Windows システム・ファイルのインストールが終了します。

4. Windows の再起動後、または Windows システム・ファイルのインストールの完了後、Oracle Business Intelligence Tools のインストールをやり直します。



---

# Oracle Business Intelligence Tools の インストール

この章では、Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントのインストール手順について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- 2.1 項「リリース・ノートの内容の把握」
- 2.2 項「Oracle Business Intelligence Tools のインストール」
- 2.3 項「インストール後の一般的な作業」
- 2.4 項「コンポーネント固有のインストール後の作業」
- 2.5 項「コンポーネントの起動」
- 2.6 項「ユーザー・ドキュメントへのアクセス」
- 2.7 項「次の作業」

## 2.1 リリース・ノートの内容の把握

『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』には、Oracle Business Intelligence Tools の CD-ROM/DVD に収録されている製品の既知の問題と回避策が記載されています。

## 2.2 Oracle Business Intelligence Tools のインストール

インストーラを起動したら、インストーラ画面をナビゲートするためのボタンに注意してください。「インストールされた製品」をクリックすると、コンピュータ上に既存の Oracle ソフトウェアを確認できます。「戻る」または「次へ」が有効なときにクリックすると、インストーラの画面間を移動できます。また、「取消」をクリックすると、処理を停止してインストーラを終了できます。「インストール」ボタンが有効なときにクリックすると、ファイルのインストールが始まります。

「ようこそ」画面で「製品の削除」をクリックすると、既存の Oracle ソフトウェアをアンインストールできます。「インストールされた製品」および「製品の削除」オプションの詳細は、[第 3 章「Oracle Business Intelligence Tools のアンインストールおよび再インストール」](#)を参照してください。

**Oracle Universal Installer を使用して Oracle Business Intelligence Tools をインストールする手順は、次のとおりです。**

1. Oracle Database などの Oracle サービスをすべて終了します。
  2. インストーラを起動します。
    - **CD-ROM/DVD:** 「Disk 1」というラベルの付いた Oracle Business Intelligence Tools の CD-ROM または DVD をコンピュータの CD-ROM/DVD ドライブに挿入し、ルート・ディレクトリにある `setup.exe` を実行します。
    - **ダウンロード:** ダウンロード・ディレクトリから `Disk1¥setup.exe` を見つけて実行します。
- インストール中に Windows システム・ファイルのエラーが検出された場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログを閉じます。その後、[1.9.2 項](#)の手順に従ってください。
3. 「ようこそ」画面で、Oracle Universal Installer に関する情報を確認し、「次へ」をクリックします。
  4. 「ファイルの場所の指定」画面で、「ソース」のパスを確認し、「インストール先」の情報を指定します。コンピュータ上のディレクトリを移動するには、「参照」ボタンを使用します。
    - **ソース:** デフォルトを変更しないでください。これは `products.xml` ファイルまでのフルパスで、このファイルから製品がインストールされます。インストーラによって、インストール・プログラムの `products.jar` ファイルのデフォルト値が検出され、使用されます。
    - **インストール先:** 製品のインストール先となる Oracle ホーム・ディレクトリの名前とフルパスです。提示されたデフォルトの名前とパスを使用するか、別の名前を選択できます。Oracle ホームのパスは、実在する絶対パスでなければなりません。環境変数名やスペースを含めることはできません。Oracle ホーム・ディレクトリの選択手順は、[1.7 項「1つの Oracle ホーム・ディレクトリでの共存」](#)を参照してください。
- 「次へ」をクリックして続行します。
5. 「インストール・タイプの選択」画面で、実行するインストールのタイプと、インストールする製品言語を選択します。選択できるインストール・オプションは次のとおりです。
    - **ビジネス・ユーザー:** このオプションを選択すると、[OracleBI Spreadsheet Add-In](#) がインストールされます。
    - **管理者/パワー・ユーザー:** このオプションを選択すると、[OracleBI Discoverer Administrator](#) がインストールされます。

- **開発者**: このオプションを選択すると、[OracleBI Beans](#) および [Oracle Reports Developer](#) がインストールされます。
- **カスタム**: このオプションを選択すると、「使用可能な製品コンポーネント」画面が表示されます。「次へ」をクリックすると、[OracleBI Spreadsheet Add-In](#)、[OracleBI Discoverer Administrator](#)、[OracleBI Beans](#)、[Oracle Reports Developer](#)、[OracleBI Discoverer Desktop](#) の中から自由に組み合わせて選択できます。

OracleBI Discoverer の実行言語を選択するには、「製品の言語」をクリックして「言語の選択」画面を表示します。この画面から、グローバリゼーション・サポートに使用する複数の言語をインストールできます。NLS\_LANG 環境変数を変更すると、コンポーネントを実行する前に言語を切り替えることができます。NLS\_LANG で指定した言語の翻訳がインストールされている場合は、指定した言語でコンポーネントが表示されます。そうでない場合は、英語が使用されます。コンポーネントのインストール後に別の翻訳を追加するには、コンポーネントをアンインストールし、再インストールする必要があります。詳しくは、[2.3.2 項「OracleBI Discoverer と NLS\\_LANG」](#) を参照してください。

「次へ」をクリックして続行します。

6. 「カスタム」インストール・タイプを選択した場合は、「使用可能な製品コンポーネント」画面が表示されます。インストールする製品コンポーネントを指定します。  
「次へ」をクリックして続行します。
7. BI Beans をインストールする場合は（「開発者」および「カスタム」インストール・タイプの一部として選択可能）、「BI Beans をインストールする JDeveloper の場所の指定」画面が表示されます。  
  
(JDeveloper の実行可能ファイルの場所ではなく) JDeveloper のインストール先ディレクトリまでのフルパスを指定します。  
  
**注意**: BI Beans をインストールする前に、コンピュータに JDeveloper をインストールしておく必要があります。
8. BI Beans と Reports Developer をインストールする場合は（「開発者」および「カスタム」インストール・タイプの一部として選択可能）、「送信メール・サーバー情報の指定」画面が表示されます。  
  
送信メール・サーバー名 (myemail.company.com など) を指定します。このフィールドを空白のままにしてインストールを続行できますが、この情報が構成されるまではレポートを電子メールで配布できません。この情報はインストール後に構成できます。
9. 「サマリー」画面で選択内容を確認したら、「インストール」をクリックしてファイルのインストールを開始します。選択内容を変更する場合は、「戻る」をクリックして必要な画面に戻ります。
10. 「インストール」画面が表示され、Oracle Business Intelligence Tools に必要なファイルがコピーされます。この画面には、インストール・ログの場所も表示されます。  
  
インストール・プロセスを中止するには、「インストールの中止」をクリックします。製品のインストール全体を中止することを確認するメッセージが表示されます。
11. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面が表示され、次に Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントの「ようこそ」ページが表示されます。「次へ」をクリックします。
12. Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントの「完了」ページで、「終了」をクリックします。
13. 製品のインストールが完了すると、インストールの完了画面が表示されます。

インストール・プログラムを終了するには、「終了」をクリックします。インストール・プログラムを終了することを確認するメッセージ・ダイアログが表示されます。終了するには「はい」、インストール・プログラムを続行するには「いいえ」をクリックします。

製品のインストールが正常に終了したら、[2.3 項「インストール後の一般的な作業」](#) および [2.4 項「コンポーネント固有のインストール後の作業」](#) に進んでさらに手順を実行します。

---

**注意：** 非対話型インストールを実行する場合も、インストールの構成フェーズでは引き続き Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタント (NetCA) 画面が表示されます。NetCA 画面は、Oracle Universal Installer のウィンドウまたはスプラッシュ画面の奥に表示される場合があります。NetCA 画面がレスポンスを待っているため、インストールが途中で停止したように思われますが、そうではありません。インストールを続行する手順は、次のとおりです。

1. NetCA ダイアログが見えるように Oracle Universal Installer ウィンドウを移動します。
  2. 「次へ」をクリックします。
  3. 「終了」をクリックします。
- 

## 2.3 インストール後の一般的な作業

次に示す一般的なインストール後のチェックリストを確認し、実際のインストールおよび環境に該当する作業を実行してください。

---

**注意：** 特に明示のないかぎり、`BIT_ORACLE_HOME` は、インストール時に使用した Oracle Business Intelligence Tools ホーム・ディレクトリを示します。

---

### 2.3.1 OracleBI Discoverer と tnsnames.ora

エンド・ユーザーが Discoverer を使用できるように、そのユーザーによるクエリーの対象となるデータが格納されているデータベース（および EUL が別のデータベースにインストールされている場合はそのデータベース）について、`tnsnames.ora` ファイルにエントリを追加する必要があります。

選択したインストール・タイプに応じて、`tnsnames.ora` および `sqlnet.ora` ファイルが `BIT_ORACLE_HOME¥network¥ADMIN` ディレクトリにインストールされている場合があります。これらのファイルは、テキスト・エディタを使用して手動で更新するか、構成ツールの Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントを使用して更新できます。構成ツールの詳細は、Oracle データベース・ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

### 2.3.2 OracleBI Discoverer と NLS\_LANG

OracleBI Discoverer ユーザー・インタフェースは、インストール時に選択した任意の言語で表示できます。表示言語を設定するには、`HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE¥NLS_LANG` レジストリ・キーを設定します。

`NLS_LANG` によって、コンポーネントで使用される言語、地域依存の規則およびキャラクタ・セットが制御されます。`NLS_LANG` を別の値に変更するまで、OracleBI Discoverer ではその設定が使用されます。

`NLS_LANG` には、言語、地域およびキャラクタ・セットの3つの要素があります。これらは次のフォーマットで設定します。

< 言語 >\_< 地域 >.< キャラクタ・セット >

たとえば、値 `Japanese_Japan.JA16EUC` を使用して `NLS_LANG` を設定すると、コンポーネントが日本語で実行され、日本の文化にあわせた規則が使用され、データ操作には EUC キャラクタ・セットが使用されます。

`NLS_LANG` の詳細は、『Oracle Application Server グローバリゼーション・ガイド』（Oracle Application Server のドキュメント・ライブラリに含まれる）を参照してください。

**注意：** Windows では、`NLS_LANG` を環境変数として設定できます。ただし、この設定により `NLS_LANG` レジストリ設定がオーバーライドされます。

### 2.3.3 追加フォント

インストール時に製品言語セットを選択すると、JDK で言語を正しく表示できるように、フォントが自動的にインストールされます。フォントは `BIT_ORACLE_HOME/jdk/jre/lib/fonts` ディレクトリにインストールされます。

その後、インストール時に選択しなかった言語でテキストを表示する必要がある場合もあります。たとえば、Oracle JDeveloper などの Java 依存コンポーネントを使用する際に、Java で必要なフォントがない場合は、そのフォントを手動でインストールすることで問題を解決できます。

表 2-1 に、Oracle Business Intelligence Tools に付属のフォントを示します。

**表 2-1 Oracle Business Intelligence Tools に付属のグローバリゼーション・サポート・フォント**

ファイル名	説明
ALBANWTJ.TTF	Albany WT 日本語フォント
ALBANWTK.TTF	Albany WT 韓国語フォント
ALBANWTS.TTF	Albany WT 簡体字中国語フォント (BI Beans のみ)
ALBANWTT.TTF	Albany WT 繁体字中国語フォント (BI Beans のみ)
ALBANYWT.TTF	日本語、中国語、韓国語以外の非英語言語用 Albany WT フォント (BI Beans のみ)

フォントをインストールするには、表から必要なフォント名を選択し、次の手順を実行します。

1. CD-ROM または DVD を挿入します。インストーラが起動した場合は閉じてください。フォントのインストールにはインストーラを使用しません。
2. **CD-ROM/DVD:** CD-ROM/DVD のルート・ディレクトリに移動し、`/extras/fonts` サブディレクトリに移動します。  
**DVD:** DVD のルート・ディレクトリに移動し、`/bi/extras/fonts` サブディレクトリに移動します。
3. フォント・ファイルを `BIT_ORACLE_HOME/jdk/jre/lib/fonts` にコピーします。

### 2.3.4 インストール後の Oracle Business Intelligence Tools でのアシスティブ・テクノロジーと Java Access Bridge の使用 (Windows のみ)

インストール後の Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントでスクリーン・リーダーなどのアシスティブ・テクノロジーを使用するには、Java Access Bridge をインストールして構成する必要があります。詳細は、[D.2 項「インストール済 Oracle コンポーネントで使用するための Java Access Bridge の設定」](#) を参照してください。

## 2.4 コンポーネント固有のインストール後の作業

コンポーネント固有のインストール後のチェックリストを確認し、必要な作業をすべて実行してください。

### 2.4.1 Spreadsheet Add-In

Spreadsheet Add-In のデータベース要件は BI Beans と同じです。アドインを使用する前に、[2.4.3.1 項「データベースに関する考慮事項」](#)の手順に従っていることを確認してください。

Spreadsheet Add-In に固有の、インストール後の要件は他にありません。

### 2.4.2 Discoverer Administrator

旧バージョンの Discoverer Administrator (旧称 Discoverer Administration Edition) がコンピュータ上にある場合は、Discoverer Administrator を使用して管理作業を実行する前に、End User Layer をアップグレードする必要があります。詳細は、Oracle Developer Suite のドキュメント・ライブラリにある『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』の第 24 章「以前のリリースの Discoverer からのアップグレード」を参照してください。

### 2.4.3 BI Beans

ユーザーの環境に適したインストール後の作業を実行します。次の点に注意してください。

- BI Beans カタログをインストールする前に、DBA ロール権限を使用してデータベース・ユーザーにアクセスする必要があります。
- JDeveloper のデータに接続する前に、Oracle Database をインストールおよび構成する必要があります。
- JDeveloper の準備手順は、埋込み OC4J インスタンスを含む JDeveloper 環境全体に影響します。

#### 2.4.3.1 データベースに関する考慮事項

BI Beans では、Oracle9i リリース 2 データベースまたは Oracle Database 10g Enterprise Edition に格納されているデータがサポートされます。ただし、サポート対象となるのは特定のリリースおよびパッチのみです。[1.5 項「データベース要件」](#)を参照してください。

BI Beans アプリケーションの接続先データベースのバージョンに応じて、次のいずれかの項を参照してください。

- [2.4.3.1.1 項「BI Beans と併用する Oracle9i リリース 2 データベースの準備」](#)
- [2.4.3.1.2 項「BI Beans と併用する Oracle Database 10g Enterprise Edition の準備」](#)

**2.4.3.1.1 BI Beans と併用する Oracle9i リリース 2 データベースの準備** Oracle9i リリース 2 データベースと併用する場合は、次の作業を実行します。

1. Oracle9i リリース 2 データベースをインストールします (まだインストールしていない場合)。
  - 手順の説明は、次の URL の Oracle Technology Network から該当するプラットフォームの Oracle9i のインストール・ガイドをダウンロードしてください。  
<http://www.oracle.com/technology>
  - サポートされているデータベース・バージョンについては、[1.5 項「データベース要件」](#)を参照してください。

**注意:** データベース・クライアントをインストールするには、必ず別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。

2. 『Oracle OLAP 表キューブ集計と問合せ操作のベスト・プラクティス』に記載される構成設定に従って、データベースを構成します。このドキュメントにアクセスするには、パッチ・セット 2529822 をダウンロードします。BI Beans が正しく動作し、効率的に機能するためには、これらの構成設定に正確に従う必要があります。このドキュメントは必要に応じて更新されるため、新しいパッチ・セットをダウンロードする際には、新しいバージョンがないかどうかを確認してください。
3. 『Oracle9i OLAP ユーザーズ・ガイド』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このドキュメントは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology>) から入手できます。また、Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツール (メタデータの作成に使用するツール) のヘルプ・システムも参照できます。代替手段として、OracleBI Warehouse Builder を使用してメタデータを作成することも可能です。適切なメタデータを定義しないと、OLAP クエリーを作成できなくなります。

#### 2.4.3.1.2 BI Beans と併用する Oracle Database 10g Enterprise Edition の準備 Oracle Database 10g Enterprise Edition と併用する場合は、次の作業を実行します。

1. Oracle Database 10g Enterprise Edition をインストールします (まだインストールしていない場合)。
  - 手順の説明は、次の URL の Oracle Technology Network から該当するプラットフォームの Oracle Database 10g Enterprise Edition のインストレーション・ガイドをダウンロードしてください。  
<http://www.oracle.com/technology>
  - サポートされているデータベース・バージョンについては、1.5 項「データベース要件」を参照してください。

**注意:** データベース・クライアントをインストールする際には、必ず別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。
2. 『Oracle OLAP 表キューブ集計と問合せ操作のベスト・プラクティス』に記載される構成設定に従って、データベースを構成します。BI Beans が正しく動作し、効率的に機能するためには、これらの構成設定に正確に従う必要があります。このドキュメントは必要に応じて更新されるため、新しいパッチ・セットをダウンロードするたびに、新しいバージョンがないかどうかを確認してください。このドキュメントにアクセスするには、パッチ・セット 3760779 をダウンロードします。
3. 『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このドキュメントは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology>) から入手できます。適切なメタデータを定義しないと、OLAP クエリーを作成できなくなります。次のいずれかのツールを使用して、メタデータを定義します。
  - Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツール。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプ・システムを参照してください。
  - OracleBI Warehouse Builder。詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
  - Analytic Workspace Manager。詳細は、『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

### 2.4.3.2 その他の作業

データベースの準備の他、ユーザーの環境に応じて次の作業を行ってください。

- 移行の詳細は、付録 B「既存の BI Beans プロジェクトの移行」を参照してください。
- JDeveloper のデフォルトにより、JDK は `..¥..¥jdk` ディレクトリにあるものと想定されます。JDK がデフォルトの場所がない場合は、`BIT_ORACLE_HOME/jdev/bin/jdev.conf` を編集して、`SetJavaHome` オプションの設定を変更する必要があります。
- JDeveloper を使用して設計する際には、分析データがプロジェクトに保存されます。ただし、開発者またはエンド・ユーザーが、分析データやオブジェクトを他の開発者やエンド・ユーザーと共有できるようにする場合は、ヘルプ・トピックの BI Beans カタログのインストールおよび構成に関する項の説明に従って、BI Beans カタログをインストールおよび構成する必要があります。
- アプリケーションをテストするには、選択したデプロイメント環境をインストールする必要があります。詳細は、ヘルプ・トピックのデプロイメント環境の要件に関する項を参照してください。
- BI Beans には、クライアント環境の構成を検証および報告するユーティリティが含まれています。この構成診断ユーティリティの目的は、構成に関する情報を収集して問題を診断することです。このユーティリティを使用すると、BI Beans、JDeveloper および Oracle Database のリリース番号などの情報が表示され、OLAP カタログのメタデータと照合した診断テストが実行されます。  
詳細は、BI Beans ヘルプ・システムの BI Beans クライアント構成の検証に関する項を参照してください。

## 2.4.4 Discoverer Desktop

ユーザーは Discoverer Desktop の使用を開始する前に、Oracle Business Intelligence Tools の CD-ROM/DVD で提供されるバージョンの Discoverer Administrator で作成（またはアップグレード）された、EUL へのアクセス権を持っている必要があります。

## 2.5 コンポーネントの起動

Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントを起動する前に、前述の各項の説明に従って、一般のおよびコンポーネント固有のインストール後の作業を完了していることを確認してください。

コンポーネントのインストール後の手順とアップグレード手順を完了後、次の説明に従ってコンポーネントを起動します。

- 2.5.1 項「Spreadsheet Add-In」
- 2.5.2 項「Discoverer Administrator」
- 2.5.3 項「BI Beans（および Oracle JDeveloper）」
- 2.5.4 項「Discoverer Desktop」
- 2.5.5 項「Oracle Reports Developer」

## 2.5.1 Spreadsheet Add-In

Microsoft Excel の設定は、インストーラによって自動的に行われます。Spreadsheet Add-In を使用するには、Microsoft Excel を起動し、「OracleBI」メニューから OLAP 機能にアクセスします。

Microsoft Excel を起動しても「OracleBI」メニューが表示されない場合は、Excel のアドイン・リストを手動で更新する必要があります。

Excel のアドイン・リストを手動で更新する手順は、次のとおりです。

1. Microsoft Excel の「ツール」メニューから、「アドイン」を選択します。
2. リスト内で Spreadsheet Add-In が選択されていることを確認します。
3. リスト内で Spreadsheet Add-In が選択されていない場合は、「参照」を選択し、`BIT_ORACLE_HOME` ディレクトリの `oraolapxl` サブディレクトリから `OLAP4XL.xla` ファイルを選択します。

## 2.5.2 Discoverer Administrator

Windows で Discoverer Administrator を起動する手順は、次のとおりです。

1. タスクバーから、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Business Intelligence Tools - `BIT_ORACLE_HOME`」→「Oracle Discoverer Administrator」の順に選択し、「Discoverer Administrator に接続」ダイアログを表示します。
2. 「ユーザー名」フィールドに、Discoverer Administrator を起動するデータベース・ユーザーのユーザー名を入力します。
3. 「パスワード」フィールドに、Discoverer Administrator を起動するデータベース・ユーザーのパスワードを入力します。
4. 次のガイドラインに従って、「接続」フィールドに接続先データベースを指定します。
  - デフォルトの Oracle データベースにログオンする場合は、「接続」フィールドに何も入力しないでください。
  - 別の Oracle データベースにログオンする場合は、データベース名を指定します（使用する名前が不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください）。
5. 「接続」をクリックし、Discoverer Administrator を起動してデータベースに接続します。

**注意：**Oracle Applications EUL への接続を可能にするには、「ツール」→「オプション」を選択し、「Oracle Business Intelligence Discoverer に接続」ダイアログに「Oracle Applications ユーザー」チェック・ボックスを表示するように選択します。

## 2.5.3 BI Beans（および Oracle JDeveloper）

Windows の場合、BI Beans で作業するにはプログラム

`BIT_ORACLE_HOME\jdev\bin\jdevw.exe` を実行して JDeveloper を起動します。メッセージを確認できるように、コンソール・ウィンドウを表示した状態で JDeveloper を実行する場合は、`BIT_ORACLE_HOME\jdev\bin\jdev.exe` を実行します。

## 2.5.4 Discoverer Desktop

Discoverer Desktop でワークブックを新規作成したり、既存のワークブックを開くには、End User Layer が事前に存在（つまり Discoverer Administrator を使用して作成）している必要があります。

Windows で Discoverer Desktop を起動する手順は、次のとおりです。

1. タスクバーから「スタート」→「プログラム」→「Oracle Business Intelligence Tools - BIT\_ORACLE\_HOME」→「Oracle Discoverer Desktop」の順に選択し、「Discoverer Desktop に接続」ダイアログを表示します。
2. 「ユーザー名」フィールドに、Discoverer Desktop を起動するデータベース・ユーザーのユーザー名を入力します。
3. 「パスワード」フィールドに、Discoverer Desktop を起動するデータベース・ユーザーのパスワードを入力します。
4. 次のガイドラインに従って、「接続」フィールドに接続先データベースを指定します。
  - デフォルトの Oracle データベースにログオンする場合は、「接続」フィールドに何も入力しないでください。
  - 別の Oracle データベースにログオンする場合は、データベース名を指定します（使用する名前が不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください）。
5. 「接続」ボタンをクリックし、Discoverer Desktop を起動してデータベースに接続します。

**注意：** Oracle Applications EUL への接続を可能にするには、「ツール」→「オプション」を選択し、「Oracle Business Intelligence Discoverer に接続」ダイアログに「Oracle Applications ユーザー」チェック・ボックスを表示するように選択します。

## 2.5.5 Oracle Reports Developer

Windows で Oracle Reports Developer を起動する手順は、次のとおりです。

1. タスクバーから「スタート」→「プログラム」→「Oracle Business Intelligence Tools - BIT\_ORACLE\_HOME」→「Reports Developer」→「Reports Builder」の順に選択します。

Linux および Solaris で Oracle Reports Developer を起動する手順は、次のとおりです。

1. <ORACLE\_HOME>/bin ディレクトリにナビゲートし、rwbuilder.sh スクリプトを実行します。

## 2.6 ユーザー・ドキュメントへのアクセス

すべてのコンポーネントには、そのコンポーネントとともにインストールされたオンライン・ヘルプが備わっています。コンポーネントの使用の詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。

コンポーネントによっては追加ドキュメントが提供されており、Oracle Technology Network <http://www.oracle.com/technology/products/bi> で入手できます。このサイトでは、ホワイト・ペーパーや最新版ドキュメントなどの資料も提供されています。

次の Oracle Business Intelligence ドキュメントは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM/DVD に収録されています。

- このマニュアル（『Oracle Business Intelligence Tools インストレーション・ガイド』）
- 『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』

Oracle Business Intelligence Tools のドキュメントを CD-ROM/DVD から直接表示する手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを使用して、CD-ROM/DVD の doc ディレクトリにある `index.htm` ファイルを開きます。
2. タブをクリックします。
3. ドキュメント・タイトルの横にある HTML または PDF リンクをクリックし、そのドキュメントの内容を表示します。

## 2.7 次の作業

インストールが完了した後、次の作業に進みます。

- Oracle Business Intelligence Tools のスタート・ガイドを利用するには、タスクバーから、「スタート」→「プログラム」→「OracleBI Tools - BIT\_ORACLE\_HOME」→「ようこそ」ページの順に選択します。「ようこそ」ページでは、Quick Tour、Samples、Oracle By Example Tutorials などのリソースや、Oracle Technology Network にあるその他のリソースが紹介されています。
- 『Oracle Business Intelligence 概要』に目を通します（詳細は、2.6 項「ユーザー・ドキュメントへのアクセス」を参照してください）。
- コンポーネント固有のユーザーズ・ガイドに目を通します（詳細は、2.6 項「ユーザー・ドキュメントへのアクセス」を参照してください）。
- Oracle Business Intelligence Tools の使用を開始します（詳細は、2.5 項「コンポーネントの起動」を参照してください）。
- OracleBI Beans について次のトピックに目を通します。
  - BI Beans スタート・ガイド: JDeveloper ヘルプ・システムのトピックで、チュートリアルへのリンクが含まれています。
  - OracleBI Beans API リファレンス: JDeveloper ヘルプ・システムからアクセス可能です。目次で「リファレンス」の下を探してください。
  - OracleBI Beans サンプル: 一般的なアプリケーション・タスクのコード記述に役立つように設計されています。Oracle Business Intelligence の次の Web サイトで公開されています。  
<http://www.oracle.com/technology/products/bi>
- 付録 B 「既存の BI Beans プロジェクトの移行」: OracleBI Beans アプリケーションを前のリリースから移行する方法が記載されています。



---

## Oracle Business Intelligence Tools の アンインストールおよび再インストール

この章では、Oracle Business Intelligence Tools のアンインストール手順について説明します。複数またはすべてのコンポーネントをアンインストールする場合、必ずこの章に示す順序に従ってください。

この章では、実行する順序どおりにアンインストール手順を示しています。

- 3.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のアンインストール」
- 3.2 項「Oracle Business Intelligence Tools の再インストール」

## 3.1 Oracle Business Intelligence Tools のアンインストール

コンピュータから Oracle Business Intelligence Tools を削除するには、必ず Oracle Universal Installer を使用します。次の項では、アンインストール・プロセスを順に説明します。

アンインストールの前に、すべての Oracle サービスを終了します。

Oracle Technology Network から JDeveloper をダウンロードおよびインストールした場合、Oracle Universal Installer を使用して JDeveloper をアンインストールできないため注意してください。

インストーラを使用して Oracle Business Intelligence Tools をアンインストールする手順は、次のとおりです。

1. [2.2 項「Oracle Business Intelligence Tools のインストール」](#)の手順 1 および 2 の指示に従ってインストーラを起動します。

インストーラにより、このコンピュータにインストールされているすべての Oracle 製品が表示され、不要な製品をアンインストールできます。この章の指示は、Oracle Business Intelligence Tools を中心に説明しています。

Oracle Business Intelligence Tools の個々のコンポーネントはアンインストールできません。コンポーネントを 1 つのみ選択した場合でも、インストーラにより Oracle Business Intelligence Tools スイート全体が削除されます。

2. Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面で、「製品の削除」または「インストールされた製品」をクリックします。
3. 「インベントリ」画面でインストール済製品のリストを確認してから、**Oracle Business Intelligence Tools 10g** リリース 2 (10.1.2.1) を選択します。

可能な場合、製品名の前にあるプラス (+) またはマイナス (-) 記号により、その製品の従属コンポーネントおよびファイルのリストを開閉できます。

4. 「Oracle Business Intelligence Tools」ボックスを選択し、「製品情報」ボックスに表示された場所のフルパスをメモします。この情報は、インストーラの完了後、ファイルおよびフォルダを手動で削除する場合に必要となります。
5. 続行する準備ができたなら、「削除」をクリックします。
6. 「確認」画面で選択内容を確認し、「はい」をクリックしてアンインストール・プロセスを開始します。

または、選択内容を変更する必要がある場合、「いいえ」をクリックして「インベントリ」画面に戻ります。

インストーラに、アンインストール・プロセスを監視するための「削除」プログレス・バーが表示されます。アンインストールを停止する場合は、「取消」をクリックし、アンインストールの停止の確認を求めるプロンプトが表示されたら「はい」をクリックします。

7. アンインストール後、インストーラに再度「インベントリ」画面が表示されます。「閉じる」をクリックしてこの画面を閉じ、「ようこそ」画面に戻ります。
8. 「ようこそ」画面で、「取消」をクリックしてインストーラを終了した後、「はい」をクリックして終了を確認します。
9. ファイルおよびフォルダが残っている場合は手動で削除する必要があります。手順 4 でメモした場所に移動し、ファイルおよびフォルダを削除します。
10. コンピュータを再起動します。

これで Oracle Business Intelligence Tools のアンインストールが正常に完了しました。

## 3.2 Oracle Business Intelligence Tools の再インストール

インストーラでは、Oracle Business Intelligence Tools の既存のインストールを追加コンポーネントによりアップグレードできます。そのためには、[2.2 項「Oracle Business Intelligence Tools のインストール」](#)の手順 1 および 2 の指示に従ってインストーラを再度起動し、必要なコンポーネントが含まれるインストール・タイプを選択します。

インストーラでは、既存のコンポーネント・インストールは上書きされません。Oracle Business Intelligence Tools を完全に再インストールするには、まず [3.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のアンインストール」](#)の指示に従って製品を完全にアンインストールしてから、[第 2 章「Oracle Business Intelligence Tools のインストール」](#)の指示に従って製品をインストールする必要があります。



# A

---

---

## トラブルシューティング

この付録には、インストールでエラーまたは問題が発生した場合に使用するリファレンス情報が含まれます。この付録の項目は次のとおりです。

- [A.1 項「開始する前に」](#)
- [A.2 項「インストールのトラブルシューティング」](#)

## A.1 開始する前に

Oracle Business Intelligence Tools のインストールの問題を修正する前に、次の項目を確認することをお勧めします。

- [A.1.1 項「ハードウェア要件およびインストール前の要件の確認」](#)
- [A.1.2 項「リリース・ノートの内容の把握」](#)

### A.1.1 ハードウェア要件およびインストール前の要件の確認

最初に、Oracle Business Intelligence Tools のハードウェアおよびソフトウェア要件とインストール前の作業を確認します。

- [1.3 項「ハードウェア要件」](#) で指定しているハードウェア要件をコンピュータが満たしていることを確認します。
- ソフトウェアの動作環境が Oracle Business Intelligence Tools 10g リリース 2 (10.1.2.1) でサポートされていることを確認します。サポートされる動作環境のリストは、[1.4 項「動作環境および必要なパッチ」](#) を参照してください。
- サポートされるソフトウェア動作環境が、[1.4 項「動作環境および必要なパッチ」](#) で指定しているソフトウェア要件を満たしていることを確認します。
- [1.8 項「インストール前の作業」](#) の冒頭で指定している製品レベルのインストール前の作業をすべて完了していることを確認します。
- インストールするコンポーネントのコンポーネントレベルのインストール前の作業をすべて完了していることを確認します。これらの作業は [1.8.4 項「コンポーネント固有のインストール前の作業」](#) に示しています。

### A.1.2 リリース・ノートの内容の把握

インストール前に、『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』に目を通すことをお勧めします。このリリース・ノートは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/products/bi>) で提供しています。

## A.2 インストールのトラブルシューティング

この項では、Oracle Business Intelligence Tools のインストール中に発生する一般的な問題と、その解決方法について説明します。この項の項目は次のとおりです。

- [A.2.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のインストール」](#)
- [A.2.2 項「Oracle Business Intelligence Discoverer をインストールするためのインストール・タイプの選択」](#)
- [A.2.3 項「Oracle Business Intelligence Discoverer インストール後の Discoverer End User Layer \(EUL\) のアップグレード」](#)

### A.2.1 Oracle Business Intelligence Tools のインストール

Oracle Business Intelligence Tools のインストール中にエラーが発生した場合、次の手順を実行します。

- **インストーラを終了しない:** インストーラを実行したままにすると、インストール・ログ・ファイルがより簡単に見つかります。
- **誤った情報:** いずれかのインストール画面に誤った情報を入力した場合は、「戻る」をクリックしてその画面まで戻り、情報を訂正してインストールを続行します。
- **コピーまたはリンクのエラー:** ファイルのコピーまたはリンク付け中にインストーラによりエラーが報告された場合、次の手順を実行します。

1. エラーをメモしてから、原因についてインストール・ログを確認します。インストール・ログは、Oracle インベントリ・ディレクトリのログ・サブディレクトリ内にあり、ファイル名は次のとおりです。

- installActionstimestamp.log
- oraInstalltimestamp.err
- oraInstalltimestamp.out

文字列 *timestamp* は、インストールの開始時にインストーラによってファイル名に追加される値であり、書式は *yyyy-mm-dd\_hh-mm-ss[AM|PM]* となります。

*oracle\_inventory* ディレクトリの場所は、コンピュータに Oracle 製品を最初にインストールするときに指定します。

2. [第 3 章「Oracle Business Intelligence Tools のアンインストールおよび再インストール」](#) の指示に従って、失敗したインストールを削除します。
  3. エラーの原因となった問題を訂正します。
  4. Oracle Business Intelligence Tools のインストールを再度開始します。
- **BI Beans との接続の問題:** BI Beans には、クライアント環境の構成を検証および報告するユーティリティが含まれています。この構成診断ユーティリティの目的は、構成に関する情報を収集して問題を診断することです。このユーティリティを使用すると、BI Beans、JDeveloper および Oracle Database のリリース番号などの情報が表示され、OLAP カタログのメタデータと照合した診断テストが実行されます。

詳細は、BI Beans ヘルプ・システムの BI Beans クライアント構成の検証に関する項を参照してください。

## A.2.2 Oracle Business Intelligence Discoverer をインストールするためのインストール・タイプの選択

Oracle Business Intelligence Discoverer のインストール時に選択するインストール・タイプが不明な場合は、次の説明に従って適切なタイプを選択します。

### 問題

Discoverer Administrator または Discoverer Desktop をインストールする際、どのインストール・タイプを選択すればいいかわからない。

### 解決策

「インストール・タイプの選択」画面で次のオプションを選択します。

- Discoverer Administrator をインストールするには、「管理者 / パワー・ユーザー」インストール・タイプを選択します。
- Discoverer Desktop をインストールするには、「カスタム」インストール・タイプを選択します。

詳細は、2.2 項「[Oracle Business Intelligence Tools のインストール](#)」を参照してください。

## A.2.3 Oracle Business Intelligence Discoverer インストール後の Discoverer End User Layer (EUL) のアップグレード

Oracle Business Intelligence Discoverer のインストール後に EUL をアップグレードする方法がわからない場合は、次の説明を参考にしてください。

### 問題

Oracle Business Intelligence Discoverer のインストール後に EUL をアップグレードする方法がわからない。

### 解決策

EUL のアップグレード方法は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

---

## 既存の BI Beans プロジェクトの移行

この付録では、Oracle9i JDeveloper (9.0.4) からの既存の BI Beans プロジェクトの移行手順を説明します。BI Beans 10.1.2 より前のバージョンからプロジェクトを移行する必要がある場合は、[B.5 項「BI Beans カタログ移行後の作業 \(オプション\)」](#)で説明するオプション・タスクを実行することを検討してください。この付録の項目は次のとおりです。

- [B.1 項「Oracle OLAP インスタンスの移行 \(オプション\)」](#)
- [B.2 項「BI Beans カタログの移行」](#)
- [B.3 項「旧リリースからのユーザー設定の移行」](#)
- [B.4 項「BI Beans ワークスペースの移行」](#)
- [B.5 項「BI Beans カタログ移行後の作業 \(オプション\)」](#)

## B.1 Oracle OLAP インスタンスの移行（オプション）

BI Beans 10.1.2 アプリケーションは、Oracle9i リリース 2 (9.2) Enterprise Edition または Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) Enterprise Edition で実行できます。その他の移行手順を実行する前に、次のリストの説明に従って、使用するデータベース・バージョンを決定する必要があります。

- BI Beans アプリケーションを Oracle9i リリース 2 (9.2) Enterprise Edition で実行するようにアップグレードする必要があり、現在は以前のバージョンのデータベースで実行されている場合は、アプリケーションを移行する前にデータベースをアップグレードする必要があります。詳細は、『Oracle9i OLAP Release 2 - Installation Guide』を参照してください。
- BI Beans アプリケーションを Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) Enterprise Edition で実行するようにアップグレードする必要があり、現在は以前のバージョンのデータベースで実行されている場合は、アプリケーションを移行する前にデータベースをアップグレードする必要があります。Oracle OLAP の移行の詳細は、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) Enterprise Edition 用の『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

サポートされているデータベース・バージョンについては、[1.5 項「データベース要件」](#)を参照してください。

## B.2 BI Beans カタログの移行

リモート BI Beans カタログを移行するには、BI Beans に付属するアップグレード・ユーティリティを実行します。このユーティリティは `bi_upgradecatalog.bat` という名前です。 `JDEV_HOME\bibeans\bin` ディレクトリにあります。 `JDEV_HOME` は、JDeveloper がインストールされているディレクトリです。

**重要：**このユーティリティを使用できるのは、BI Beans リリース 9.0.3 または 9.0.4 から BI Beans リリース 10.1.2 にアップグレードする場合のみです。必ず最新バージョンの BI Beans に付属するユーティリティを実行してください。

カタログの移行ユーティリティの詳細は、BI Beans ヘルプ・システムの BI Beans カタログのアップグレード・ユーティリティに関するヘルプ・トピックを参照してください。

### B.2.1 Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 に移行するための付加的手順

アップグレード・ユーティリティを実行して既存の BI Beans カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 (10.2.0.1 以上) にアップグレードするのみでなく、次の手順でデータベース・サーバー上の PL/SQL パッケージも更新する必要があります。

1. 次の手順でパッチをインストールします。
  - a. BI Beans インストール・ディレクトリ内で `bidatasvr.jar` を探します。
  - b. `bidatasvr.jar` から `bibcoreb.pls` ファイルを抽出します。 `jar` には圧縮範囲が設定されており、`oracle\dss\persistence\storagemanager\bi\scripts` ディレクトリからローカル・ディレクトリに抽出されます。
2. 次の手順でパッチを適用します。
  - a. コマンド・プロンプトから次のように入力します。

```
cd oracle\dss\persistence\storagemanager\bi\scripts
```
  - b. `sqlplus` セッションをオープンします。たとえば、次のように入力します。

```
sqlplus BIBCAT/BIBCAT@mydb
```

`mydb` は接続文字列、`BIBCAT/BIBCAT` は BI Beans カタログを管理するスキーマの所有者のユーザー名 / パスワードです。

- c. sqlplus プロンプトから次のように入力します。

```
SQL> @bibcoreb.pls
```

次の出力が表示されます。

```
Package body created.
Commit complete.
```

- 3. 次の手順でパッケージが有効であることを確認します。

- a. sqlplus セッションを再オープンします。

- b. 次の SQL コマンドを入力します。

```
SQL> column OBJECT_NAME format a30;
SQL> column STATUS format a10;
SQL> select object_name, status from user_objects where object_
name='BISM_CORE';
```

次のように、パッチが正常に適用されたことが示されます。

OBJECT_NAME	STATUS
BISM_CORE	VALID
BISM_CORE	VALID

## B.3 旧リリースからのユーザー設定の移行

Oracle9i JDeveloper (9.0.4) のリリースから Oracle JDeveloper10g にユーザー設定を移行できます。初めて Oracle JDeveloper10g を開いたときに、ユーザー設定を旧バージョンから移行するように求めるプロンプトが表示されます。デフォルトでは、すべての設定が移行するようにマーク付けされています。ユーザー設定、特にデータベース接続のアップグレードを許可する必要があります。データベース接続が移行されていない場合、移行するいずれかのワークスペースに存在する、BI Designers により参照される接続を再作成する必要があります。

Oracle では、Oracle JDeveloper リリース 3.2.3 から Oracle9i JDeveloper (9.0.4) 以上への直接移行はサポートされていません。

## B.4 BI Beans ワークスペースの移行

プロジェクトを移行するには、次の手順を実行します。

1. ワークスペースを移行する前に、これらのワークスペースのバックアップ・コピーを作成します。
2. B.3 項「旧リリースからのユーザー設定の移行」の説明に従ってデータベース接続を自動的に移行しなかった場合、続行する前にこれらの接続を移行します。Oracle JDeveloper10g で、「接続ナビゲータ」を表示し、「データベース」を右クリックして、「接続のインポート」を選択します。

Oracle9i JDeveloper (9.0.4) の接続を使用する BIDesigner を開く前に、必ずこの手順を完了してください。

3. JDeveloper でプロジェクトを移行します。

Oracle9i JDeveloper (9.0.4) で作成されたワークスペース、または Oracle JDeveloper10g のワークスペースに追加する Oracle9i JDeveloper (9.0.4) で作成されたプロジェクトを移行する必要があります。Oracle JDeveloper10g を起動し、Oracle9i JDeveloper (9.0.4) の BI Beans ワークスペースを開くと、「移行ウィザード」が表示されます。このウィザードでは、多くの移行手順を自動的に実行できます。たとえば、このウィザードにより、ワークスペースが適切な Oracle JDeveloper10g バージョンに更新されます。UIX のインストール可能なファイルおよび HTML アプリケーションのデータ・バインド構文の更新など、適宜その他のオプションを自動的に実行できます。

ウィザードにより、任意のローカル・カタログを自動的に移行できます。ウィザードでは、移行前にカタログをバックアップするかどうかも指定できます。特定のローカル・カタログを移行しない場合は、ウィザードでそれらのカタログを選択解除できます。リモート・カタログのアップグレードの詳細は、[B.2 項「BI Beans カatalogの移行」](#)を参照してください。

4. 自動アップグレードが完了したら、「コンパイラ」オプションで「非推奨を指摘」を選択し、置換が必要な推奨されないクラスまたはタグを識別するようアプリケーション・コードをコンパイルし、表示されたエラーを修正します。
5. 次の行を削除してプロジェクト設定を編集し、このオプションが設定されていないことを確認します。このオプションが設定されていると、JDeveloper では新規バージョンではなく旧バージョンの JDBC が使用されます。

```
-Djava.ext.dirs=C:\¥Jdev¥JDev904_2.7.5.32.1¥jdev¥lib¥patches
```

6. アプリケーションにプレゼンテーションが含まれていて、その編集に Thin Query Builder を使用すると、「開始」ページでメジャーが選択されていないことがわかる場合があります。この問題を解決するには、次の手順を実行します。
  - a. JDeveloper でプレゼンテーションを編集します。
  - b. プレゼンテーション・エディタの「項目」パネルで「OK」または「適用」をクリックします。
  - c. アプリケーションの設計時カタログを実行時カタログに再デプロイします。
7. 所有するアプリケーションの種類に応じて、次の各項で説明する適切な手順を実行します。
  - [B.4.1 項「BI Beans JSP アプリケーションの手動移行手順」](#)
  - [B.4.2 項「BI Beans UIX アプリケーションの手動移行手順」](#)
  - [B.4.3 項「BI Beans Java クライアント・クラス・アプリケーションの手動移行手順」](#)
  - [B.4.4 項「BI Beans Java サーブレット・アプリケーションの手動移行手順」](#)

ヒント: 手動の移行手順に関する最新情報は、『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』を参照してください。

## B.4.1 BI Beans JSP アプリケーションの手動移行手順

JSP アプリケーションについては、次の各項で説明する手動移行手順を実行します。

### B.4.1.1 ネームスペースの更新

各ページのコードの 1 行目にあるネームスペースを編集します。次の例に示すように、既存のネームスペースに「/jsp」を追加します。

編集前:

```
<%& taglib uri="http://xmlns.oracle.com/bibbeans" prefix="orabi" %>
```

編集後:

```
<%& taglib uri="http://xmlns.oracle.com/bibbeans/jsp" prefix="orabi" %>
```

### B.4.1.2 新規 BI JSP タグ機能へのアクセス

このリリースの BI Beans に新規に追加された JSP タグ機能にアクセスするには、次の手順を実行する必要があります。

1. 移行アプリケーションのすべての JSP ページの最上部に、次のテキストを追加します。

```
<%@ taglib uri="http://java.sun.com/jstl/core" prefix="c"%>
```

2. 次の手順を実行して、JSTL タグ・ライブラリがプロジェクトに含まれることを確認します。
  - a. `<project>¥public_html¥WEB-INF¥lib` ディレクトリをチェックし、ここに `standard.jar` ファイルが含まれるかどうかを確認します。含まれない場合は、手順 b および c を実行します。
  - b. 移行プロジェクトで任意の JSP ページを開きます。「コンポーネント・パレット」で、JSTL コアを選択します。out タグをページにドラッグします。タグ・エディタで「OK」を選択します。
  - c. JSP ページで、`<c:out></c:out>` タグを検索し、削除します。
 

`<project>¥public_html¥WEB-INF¥lib` ディレクトリを再度チェックします。このディレクトリに `standard.jar` ファイルが存在する必要があります。

### B.4.1.3 <body> タグの更新

BIThinSession タグが含まれる各ページで HTML `<body>` タグを更新します。ネームスペースを編集した後、BIBody タグおよび InitBITags タグを更新する必要があります。BIBody タグは、ビジュアル・エディタに表示されている場合、ページ上でドラッグ・アンド・ドロップできます。InitBITags タグは、フォームの1つ目の子としてドラッグ・アンド・ドロップできます。

ドラッグ・アンド・ドロップ技術が無効である場合、次の手順で説明するように、タグを手動で編集できます。

1. `<body>` タグを削除し、その場所に、必須の BI タグである BIBody (HTML `<form>` タグの前) および InitBITags (HTML `<form>` タグの後) を挿入します。
2. `<form>` のアクション属性を JSP ページ名に設定します。
3. メソッド属性を POST に設定します。
4. InitBITags の parentForm 属性を `<form>` の名前に設定します。

次のコードは、`biexplorerdetail1.jsp` というページにおけるこれらのタグの例を示しています。

```
<orabi:BIBody>
<form name="BIForm" method="POST" action="biexplorerdetail1.jsp" >
<orabi:InitBITags parentForm="BIForm"/>
```

**注意:** JSP ページ名の指定にスラッシュがないことを確認してください。さらに、終了タグ `</body>` を `</orabi:BIBody>` に置き換えてください。

### B.4.1.4 プレゼンテーションにアクセスしたコードの更新

アプリケーションに JSP ページの scriptlet が含まれる場合、または ID によりプレゼンテーションにアクセスし、このプレゼンテーションを ThinDataviewCommon にキャストした Java コードが含まれる場合、このプレゼンテーションをプレゼンテーション Bean にキャストし、この Bean からデータ・ビューを取得する必要があります。

このためには、次のようなコード行を変更し、

```
ThinDataviewCommon dataView =
(ThinDataViewCommon)pageContext.findAttribute
("biuntitled1_pres1");
```

次のようにします。

```
ThinDataviewCommon tdvc = null;
Presentation p = (Presentation)pageContext.findAttribute
("biuntitled1_pres1");
if (p != null)
    tdvc = p.getView();
```

新規プレゼンテーション Bean にアクセスするには、次のインポートを追加します。

```
oracle.dss.thin.beans.dataView.Presentation;
```

### B.4.1.5 SaveButton JSP タグの更新

SaveButton JSP タグは SaveLink タグで置き換えられました。アプリケーションで SaveButton JSP タグが使用されている場合、次の手順を実行してアプリケーションを更新できます。

1. BITHinSession で、次のような SaveButton タグを検索します。

```
<orabi:SaveButton id="analyze1_SaveButton1"
presentationId="analyze1_Presentation1"
saveConfirmationPage="saveconf1.jsp"
saveConfirmationId="saveconf1_SaveConfirmation1" />
```

次の例に示すように、SaveLink タグを使用するよう SaveButton タグを変更します。

```
<orabi:SaveLink id="analyze1_SaveButton1" mode="Save"
presentationId="analyze1_Presentation1" />
```

2. SaveButton タグの Render タグを変更します。たとえば、次のような Render タグがあるとします。

```
<orabi:Render targetId="analyze1_SaveButton1" parentForm="BIForm"/>
```

Render タグを次のように編集します。

```
<orabi:Button text="Save" onClick="{analyze1_SaveButton1_
data.showDialog}"/>
```

ユーザーが「保存」ボタンをクリックすると、内部の保存ページが表示されます。

## B.4.2 BI Beans UIX アプリケーションの手動移行手順

UIX アプリケーションについては、次の各項で説明する手動移行手順を実行します。これらの手順では、BI Beans によりカスタム・アプリケーションの基盤として生成された UIX アプリケーションを使用したことを前提としています。

### B.4.2.1 イメージのパスの更新

ワークスペースにイメージが含まれる場合、次の手順の説明に従って、イメージをコピーし、BIPageTemplate UIT ファイルおよびログイン UIX ファイル内のイメージのパスを更新する必要があります。

1. BIPageTemplate UIT ファイルおよびログイン UIX ページ内のすべてのイメージのソース・パスを更新します。Oracle9i JDeveloper (9.0.4) では、イメージは public\_html¥cabo¥images¥<app\_name> ディレクトリに格納されます。Oracle JDeveloper10g では、イメージは public\_html¥<app\_name> ディレクトリに格納されます。

たとえば、このディレクトリの指定は、UIT ファイル内の次のようなタグで行われます。

```
<images source="cabo¥images¥<app_name>¥required.gif">
```

このタグを次のように変更します。

```
<images source="<app_name>¥required.gif">
```

2. アプリケーションでカスタム・イメージが使用される場合、手順 1 で指定したように、Oracle JDeveloper10g の該当するディレクトリにイメージをコピーします。

### B.4.2.2 エラー・ページの更新

移行中、UIX アプリケーションのエラー・ページにおける問題を説明したメッセージが表示される場合があります。この問題を解決するには、次のいずれかの操作を実行します。

- BI Beans 10.1.2 により自動的に提供されるデフォルトのエラー・ページを使用する場合は、プロジェクトを BI Beans 10.1.2 に移行する前に、既存のエラー・ページを削除します。
- デフォルトのエラー・ページがカスタマイズ済であり、変更内容を保持する必要がある場合は、移行する前に `<bibeans:biPageTemplate>` 要素を編集し、`renderLogoutButton` 属性を削除します。たとえば、要素が次のように表示されているとします。

```
<bibeansTemplate:biPageTemplate
  xmlns="http://xmlns.oracle.com/uix/ui"
  xmlns:data="http://xmlns.oracle.com/uix/ui"
  xmlns:ctrl="http://xmlns.oracle.com/uix/controller"
  renderLogoutButton="false"
  renderOpenButton="false"
  pageTitle="BI uiXML Application Error">
```

要素を編集し、次のテキストを削除します。

```
renderLogoutButton="false"
```

要素を編集した後、web.xml ファイルを変更します。エラー・ページのエント리는次のように表示されます。

```
<init-param>
  <param-name>oracle.cabo.servlet.errorPage</param-name>
  <param-value>cabo/bi/uix/error</param-value>
</init-param>
```

値 `cabo/bi/uix/error` を変更し、カスタマイズしたエラー・ページを指すようにします。

### B.4.2.3 部分ページ・レンダリングの要素の追加

部分ページ・レンダリング (PPR) 機能を使用するテンプレート・ページを編集する必要があります。次の例に示すように、`<body>` 要素をアプリケーション・コードに追加します。

```
<contents>
  <body>
    <contents>
      <form name="form1" method="POST">
        <contents>
```

`</body>` タグを必ず適切な場所に追加してください。

### B.4.2.4 dialogLinkDef 要素ごとのコードの追加

Oracle JDeveloper10g で、ボタン、リンクまたはイメージの `onClick` 属性に `dialogLink` をバインドするには、キー `showDialog` により `dialogLink` の `dataObject` にバインドする必要があります。たとえば、`dialogLink` の ID が `dlgLnk1` であり、`BIThinSession`、`bisession1` で定義されているとします。

Oracle9i JDeveloper (9.0.4) では、コードは次のようになります。

```
<button onClick="{bibeans:data().bisession1.dlgLnk1}"/>
```

Oracle JDeveloper10g では、コードは次のようになります。

```
<button onClick="{bibeans:data().bisession1.dlgLnk1_
data.showDialog}"/>
```

### B.4.2.5 プレゼンテーションにアクセスしたコードの更新

IDによりプレゼンテーションにアクセスし、このプレゼンテーションを `ThinDataViewCommon` にキャストする Java コードがアプリケーションに含まれる場合、このプレゼンテーションをプレゼンテーション Bean にキャストし、この Bean からデータ・ビューを取得する必要があります。

このためには、次のようなコード行を変更し、

```
ThinDataViewCommon dataview =
    (ThinDataViewCommon) pageObjects.get("<parameter>");
```

次のようにします。

```
Presentation presentation =
    (Presentation) pageObjects.get("<parameter>");
ThinDataViewCommon dataview = null;
if (presentation !=null)
    dataview=presentation.getView();
```

旧バージョンの UIX アプリケーションの Java コードには、このコード変更を加える必要がある 2 つのインスタンスがあります。

新規プレゼンテーション Bean にアクセスするには、次のインポートを追加します。

```
oracle.dss.thin.beans.dataView.Presentation;
```

### B.4.2.6 SaveDef UIX タグの更新

現行リリースでは、`saveConfirmation` タグは推奨されないため、`SaveDef UIX` タグに置き換えられています。`saveConfirmation` ページではなく、自動的に提供される内部の保存ダイアログ・ページを使用する必要があります。

たとえば、コードの元の行は次のようになります。

```
<bibeans:saveDef id="saveBtn1"
presentationId="pres1"
saveConfirmationPage="SaveConfirm1.uix"
saveConfirmationId="saveConf1" />
```

コードを次の行のようにリライトします。

```
<bibeans:saveDef id="saveBtn1" presentationId="pres1"
mode="Save" />
```

ユーザーが「保存」ボタンをクリックすると、内部の保存ページが表示されます。

## B.4.3 BI Beans Java クライアント・クラス・アプリケーションの手動移行手順

Java クライアント・クラスを使用するアプリケーションについては、次の各項で説明する手動移行手順を実行します。

### B.4.3.1 グラフのコード変更

アプリケーションにグラフを使用する場合、次のコード変更を加える必要があります。コードの次の行を変更します。

```
((GraphLayout) layout).setGraph((UIGraph) dv);
```

次のようにします。

```
((GraphLayout) layout).setGraph((Graph) dv);
```

## B.4.4 BI Beans Java サブレット・アプリケーションの手動移行手順

サブレット・アプリケーションを移行する前に、多くのカスタム・ページまたは機能を追加したかどうかを確認します。カスタマイズをそれほど追加していない場合は、JSP または UIX アプリケーションを生成し、そこでカスタマイズを再作成できます。JSP または UIX アプリケーションに切り替えることで、BI Beans の強力な新機能を簡単に利用できます。

サブレット・アプリケーションを移行する場合は、次の各項で説明する手動移行手順を実行します。

### B.4.4.1 サブレット・アプリケーションの Cabo ディレクトリ内のインストール可能ファイルの更新

JSP または UIX アプリケーションを移行すると、cabo ディレクトリ内のインストール可能ファイルが自動的に更新されます。これらのインストール可能ファイルは、サブレット・アプリケーションでは自動的に更新されません。cabo ディレクトリには、UIX および BI Beans のイメージ、スタイル・シートおよび Javascript ファイルが含まれており、これらのファイルは Oracle9i JDeveloper (9.0.4) から Oracle JDeveloper10g へ更新されています。サブレット・アプリケーションの cabo ディレクトリ内のインストール可能ファイルを更新するには、次の手順を実行します。

1. アップグレードするプロジェクトの `public_html` ディレクトリに移動します。
2. cabo ディレクトリの名前を `cabo.9.0.4` に変更します。
3. サブレット・アプリケーションの場合と同じ BIDesigner を使用して、UIX または JSP ページを新規作成します。

ページが生成されると、プロジェクトの cabo ディレクトリが新規作成されます。

4. 旧ディレクトリ (`cabo.9.0.4`) に、その他のファイル (新規スタイル・シート、.xss ファイルまたはアプリケーション固有のイメージ・ファイルを作成した場合など) が格納されていた場合、これらのファイルを新規 cabo ディレクトリにコピーする必要があります。
5. (オプション) 作成された新規ページを安全に削除できます。

### B.4.4.2 サブレット・アプリケーションのサンプルの参照

BI Beans には、サブレット・アプリケーション・サンプルのセットが付属しています。Oracle JDeveloper10g でのサブレット・アプリケーションの操作に関する推奨事項については、これらのサンプルを参照してください。たとえば、ViewToolbar に影響するコードを参照し、これに従ってアプリケーション・コードを変更します。ViewToolbar には下位互換性がありません。

## B.5 BI Beans カタログ移行後の作業（オプション）

カタログの移行後に、移行後の作業を実行してパフォーマンスを向上させることができます。

### B.5.1 カタログの移行後作業にメリットが得られる条件

次の条件がすべて存在する場合は、オプションの移行後作業を実行することを検討してください。

- BI Beans 9.0.3 または BI Beans 10g (9.0.4) から BI Beans 10.1.2 に移行したアプリケーションを使用する場合
- Oracle Database 10g で動作する移行後の BI Beans カタログを使用する場合
- アプリケーションの実行中に標準 ErrorHandler ログ内で次の警告メッセージが検出される場合

BIB-9549: クエリーにレベル情報が挿入されていません。このクエリー、関連する計算および保存された選択の再保存を依頼してください（このメッセージに続いて、レベル情報が欠落しているオブジェクトのリストが表示されます）。

**注意：**以前に BI Beans 10g (9.0.4) から移行した BI Beans 10.1.2.1 アプリケーションの場合も、カタログ移行後の作業による利点を得られる場合があります。

### B.5.2 メッセージ BIB-9549 が表示される理由

リリース 10.1.2 以降の BI Beans では、クエリー、関連するユーザー定義アイテムおよび保存された選択ごとに階層情報とレベル情報がカタログに格納されます。この情報がカタログに格納されていないオブジェクトのロードをアプリケーションでリクエストすると、クエリーは必要な情報を検索してからでなければロード操作を完了できません。メッセージ BIB-9549 は、クエリーによる欠落情報の検索中にロード操作が遅延されたことを示します。

### B.5.3 移行後作業

欠落情報のあるオブジェクトがロードされるたびに遅延しないように、BI Beans 10.1.2 を使用してカタログ内の各オブジェクトのロード操作と再保存操作を一度に実行できます。

オブジェクトをロードして再保存する手順は、次のとおりです。

1. Oracle JDeveloper10g の「ローカル・カタログ」で、各オブジェクトをダブルクリックします。この操作によりオブジェクトが開きます。
2. 各オブジェクトを再保存します。
3. 各オブジェクトをリモート・カタログにコピーします。

---

## 非対話型インストールとサイレント・インストール

この付録では、Oracle Business Intelligence Tools の非対話型インストールとサイレント・インストールについて説明します。この付録の項目は次のとおりです。

- C.1 項「非対話型インストール」
- C.2 項「サイレント・インストール」
- C.3 項「インストール前」
- C.4 項「レスポンス・ファイルの作成」
- C.5 項「インストールの開始」
- C.6 項「インストール後」
- C.7 項「サイレント・アンインストール」

## C.1 非対話型インストール

Oracle Business Intelligence Tools の非対話型インストールを実行するには、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを指定します。レスポンス・ファイルは、インストーラに対して指定するインストール設定を含んだテキスト・ファイルです。

インストーラでは、レスポンス・ファイルに含まれている変数およびパラメータ値を使用して、一部またはすべてのインストーラ・ユーザー・プロンプトに対する応答が提供されます。グラフィカル出力が用意されており、すべてのインストーラ・プロンプトにレスポンスしない場合はインストール中に情報入力が必要になることがあります。

Windows で Oracle Business Intelligence Tools を初めてインストールする場合は、必要なレジストリ・キーを作成する必要があります（詳細は、C.3 項「インストール前」を参照してください）。

Oracle Business Intelligence Tools の非対話型インストールを使用すると、インストール時に特定の画面を表示できます。

また、コマンドラインを使用してリモート位置から Oracle Business Intelligence Tools インストールを実行する場合は、非対話型インストールを使用できます。

## C.2 サイレント・インストール

Oracle Business Intelligence Tools のサイレント・インストールを実行するには、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを指定し、コマンドラインで `-silent` フラグを指定します。レスポンス・ファイルはテキスト・ファイルです。

インストーラでは、レスポンス・ファイルに含まれている変数およびパラメータ値を使用して、すべてのインストーラ・プロンプトに対する応答が提供されます。すべてのインストーラ・プロンプトに対する応答を、レスポンス・ファイルに含めます。サイレント・インストールの場合、グラフィカル出力は表示されません。

Windows で Oracle Business Intelligence Tools を初めてインストールする場合は、必要なレジストリ・キーを作成する必要があります（詳細は、C.3 項「インストール前」を参照してください）。

複数のコンピュータに同様のインストールが存在する場合は、Oracle Business Intelligence Tools のサイレント・インストールを使用します。また、コマンドラインを使用してリモート位置から Oracle Business Intelligence Tools インストールを実行する場合は、サイレント・インストールを使用します。サイレント・インストールを実行すると、グラフィカル出力もユーザー入力もないため、Oracle Business Intelligence Tools インストールを監視する必要がありません。

## C.3 インストール前

Oracle Business Intelligence Tools がコンピュータにインストールされていない場合は、次のレジストリ・キーの文字列値を作成する必要があります（値には大 / 小文字区別があります）。

- `HKEY_LOCAL_MACHINE / SOFTWARE / Oracle / em_loc = <ORACLE_HOME>`
- `HKEY_LOCAL_MACHINE / SOFTWARE / Oracle / inst_loc = OUI_Inventory_Location¥Inventory`

`ORACLE_HOME` は、インストール場所のフルパスです。

`OUI_Inventory_Location` は、Oracle Universal Installer ファイルの場所です。次に例を示します。

`C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory.`

## C.4 レスポンス・ファイルの作成

サイレント・インストールまたは非対話型インストールの前に、インストール・パックの Disk 1 に収録されているレスポンス・ファイル・テンプレートを使用して、インストール固有の情報を指定する必要があります。

Oracle Business Intelligence Tools の CD-ROM の /Disk1/stage/Response ディレクトリに収録されているレスポンス・ファイル・テンプレート  
oracle.business.intelligence.ds.Custom.rsp を開き、テキスト・エディタで変更します。

**ヒント:** 必要な場合は、oracle.business.intelligence.ds.Custom.rsp ファイルを別のファイル名 (my\_responses.rsp など) で保存し、名前を変更したファイルをインストール用のレスポンス・ファイルとして使用できます。

レスポンス・ファイルのパラメータの定義は、レスポンス・ファイル自体に記述されています。

レスポンス・ファイル内で、次の変数の値を指定する必要があります。

- COMPONENT\_LANGUAGES
- FROM\_LOCATION
- LOCATION\_FOR\_DISK2
- ORACLE\_HOME
- ORACLE\_HOME\_NAME

次のことに注意してください。

- レスポンス・ファイルを適切に構成せずにサイレント・インストールを試みると、インストーラが失敗します。
- ブール・パラメータには true または false を指定することをお勧めします。

### C.4.1 レスポンス・ファイルの例

次の例は、Oracle Business Intelligence Tools のサイレント・インストールに使用するレスポンス・ファイルから抜粋したものです。

```
RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
FROM_LOCATION="/home/BI_10121_Install/Disk1/stage/products.xml"
ORACLE_HOME="/home/BI_10121"
ORACLE_HOME_NAME="BIT_10121"
SHOW_SPLASH_SCREEN=true
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=false
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=true
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_ROOTSH_CONFIRMATION=false
SHOW_END_SESSION_PAGE=false
SHOW_RELEASE_NOTES=false
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=false
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=false
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=false
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=false
ACCEPT_LICENSE_AGREEMENT=true
TOPLEVEL_COMPONENT={"oracle.business.intelligence.ds","10.1.2.1"}
DEINSTALL_LIST={"oracle.business.intelligence.ds","10.1.2.1"}
DEPENDENCY_LIST={"oracle.java.j2ee.core:10.1.2.1"}
COMPONENT_LANGUAGES={"en","ko"}
```

## C.5 インストールの開始

インストーラでレスポンス・ファイルを使用するには、インストーラの起動時にパラメータとして使用するレスポンス・ファイルの位置を指定します。

Windows で非対話型インストールを実行するには、次のように入力します。

```
prompt> setup.exe -responseFile absolute_path_and_filename
```

たとえば、Windows では次のようになります。

```
D:\¥Installer¥Disk1> setup.exe -responseFile
¥Disk1¥stage¥response¥oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp
```

Windows でサイレント・インストールを (-silent パラメータを使用して) 実行するには、次のように入力します。

```
prompt> setup.exe -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

たとえば、Windows では次のようになります。

```
D:\¥Installer¥Disk1> setup.exe -silent -responseFile
¥Disk1¥stage¥response¥oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp
```

## C.6 インストール後

Windows では、非対話型インストールとサイレント・インストールの成否は `installActions.log` ファイルに記録されます。また、サイレント・インストールでは、`silentInstall.log` ファイルも作成されます。各ログ・ファイルは、インストール時に `oraInventory¥Logs` ディレクトリに作成されます。

インストールに成功した場合、`silentInstall<time_stamp>.log` ファイルには次の行が含まれています。

```
The installation of Oracle Business Intelligence Tools 10g was successful.
```

## C.7 サイレント・アンインストール

インストールに使用したレスポンス・ファイルにサイレント・アンインストール・パラメータを指定すると、Oracle Business Intelligence Tools のサイレント・アンインストールを実行できます。インストール用レスポンス・ファイルに次のパラメータを追加します。

```
REMOVE_HOMES={"<ORACLE_HOME to be removed>"}
```

サイレント・アンインストールを実行するには、コマンドの入力時に `-deinstall` パラメータを使用します。

```
E:¥> setup.exe -silent -deinstall -responseFile absolute_path_and_filename
```

---

## Java Access Bridge のインストール

この付録では、Windows プラットフォームに Java Access Bridge をインストールする方法について説明します。Java Access Bridge により、Oracle コンポーネントでスクリーン・リーダーを使用できます。

この付録の項目は次のとおりです。

- [D.1 項「Java Access Bridge の概要」](#)
- [D.2 項「インストール済 Oracle コンポーネントで使用するための Java Access Bridge の設定」](#)

## D.1 Java Access Bridge の概要

Java Access Bridge は、JAWS スクリーン・リーダーなどのアシスティブ・テクノロジーによる、Windows プラットフォームで実行中の Java アプリケーションの読取りを可能にします。アシスティブ・テクノロジーにより、Oracle Universal Installer や Oracle Enterprise Manager Application Server Control などの Java ベース・インタフェースを読み取ることができます。

Oracle Business Intelligence Tools インストール・メディアには、インストール時に Oracle Universal Installer で使用される Java Runtime Environment (JRE) 1.4.2 が収録されています。JRE により、インストール時に Java Access Bridge を使用できます。インストール時に JRE 1.4.2 で使用するように Java Access Bridge を設定するには、[D.2 項「インストール済 Oracle コンポーネントで使用するための Java Access Bridge の設定」](#)を参照してください。

インストール後に Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントで使用するように Java Access Bridge をインストールして構成するには、[D.2 項「インストール済 Oracle コンポーネントで使用するための Java Access Bridge の設定」](#)を参照してください。

## D.2 インストール済 Oracle コンポーネントで使用するための Java Access Bridge の設定

この項では、Oracle コンポーネントのインストール後に Java Access Bridge for Windows をインストールして構成する方法について説明します。この項の項目は次のとおりです。

- [D.2.1 項「Java Access Bridge のインストール」](#)
- [D.2.2 項「Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成」](#)

### D.2.1 Java Access Bridge のインストール

Oracle Business Intelligence Tools の CD-ROM/DVD から Java Access Bridge バージョン 1.0.4 をインストールできます。また、次の URL から zip ファイルをダウンロードして Java Access Bridge バージョン 1.2 をインストールする方法もあります。

<http://java.sun.com/products/accessbridge/>

インストール手順とその他の情報は、Sun 社の Web サイトで Java Access Bridge ドキュメントを参照してください。

Oracle Business Intelligence Tools の CD-ROM/DVD から Java Access Bridge をインストールする手順は、次のとおりです。

1. Oracle Business Intelligence Tools インストール・メディアの AccessBridge ディレクトリに移動します。

```
DRIVE_LETTER:¥Disk1¥AccessBridge
```

2. accessbridge-1\_0\_4.zip ファイルを選択し、Access Bridge をインストールするシステムにファイルを抽出します。

次に例を示します。

```
c:¥AccessBridge-1_0_4
```

3. 表 D-1 に示す Java Access Bridge ファイルを `windows_directory¥system32` ディレクトリにコピーします。

表 D-1 system32 サブディレクトリにコピーするファイル

ファイル	コピー先
<code>¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥JavaAccessBridge.dll</code>	<code>windows_directory¥system32</code>
<code>¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥WindowsAccessBridge.dll</code>	<code>windows_directory¥system32</code>
<code>¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥JAWTAccessBridge.dll</code>	<code>windows_directory¥system32</code>

## D.2.2 Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成

インストール完了後に、Access Bridge を使用するよう Oracle コンポーネントを構成できます。そのためには、インストール済 Java Access Bridge ファイルを指すようにシステム変数 `ORACLE_OEM_CLASSPATH` を設定する必要があります。

### D.2.2.1 Windows 2000、Windows XP または Windows Server 2003 用の構成

Windows 2000、Windows XP または Windows 2003 で Access Bridge を使用するよう Oracle コンポーネントを構成する手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロールパネル」 → 「システム」の順に選択して「システムのプロパティ」を表示します。
2. 「詳細」タブをクリックします。
3. 「環境変数」をクリックします。
4. 「システム環境変数」リストの下「新規」をクリックし、「新しいシステム変数」ダイアログを表示します。
5. 「変数名」フィールドに `ORACLE_OEM_CLASSPATH` と入力します。
6. 「変数値」フィールドに `jaccess.jar` および `access-bridge.jar` へのフルパスを入力します。

2つのパスはセミコロンで区切ります。引用符や空白は使用しないでください。たとえば、JRE 1.4.2 がデフォルト位置にインストールされている場合、設定は次のようになります。

```
d:¥oracle¥BIToolshome_1¥jre¥1.4.2¥lib¥ext¥jaccess.jar;d:¥oracle¥BIToolshome_1¥jre¥1.4.2¥lib¥ext¥access-bridge.jar
```

7. 「OK」をクリックします。



---

---

# 索引

## B

---

### BI Beans

- BI Beans の概要, 1-3
  - BI Beans 用の Oracle Database の設定, 2-6
  - Oracle9i JDeveloper からのプロジェクトの移行, B-1
  - インストール後の作業, 2-6
  - インストール前の要件, 1-11
  - 起動, 2-9
  - 接続の問題、トラブルシューティング, A-3
  - ソフトウェア要件、JDeveloper, 1-8
- ### BI\_ORACLE\_HOME ディレクトリ
- 指定, 2-2
  - 選択, 1-8
- ### Business Intelligence (BI)
- OracleBI Tools, 1-2

## C

---

### CPU

- インストール要件, 1-5

## D

---

### Discoverer

- EUL のアップグレード, A-4
- インストール・タイプの選択, A-4

### Discoverer Administrator

- インストール後の作業, 2-6
- 概要, 1-2
- 起動, 2-9

### Discoverer Desktop

- Discoverer Desktop の概要, 1-3
- インストール後の作業, 2-8
- 起動, 2-10
- 必要なメモリー, 1-5

## E

---

### Excel

- 「Microsoft Excel」を参照

## I

---

- installActions.log ファイル, C-4

## J

---

### Java Access Bridge

- アシスティブ・テクノロジー, 2-5
- インストール, D-2
- インストール時に使用するための設定, D-2
- インストール時のアシスティブ・テクノロジーの使用, 1-10
- インストール済 Oracle コンポーネントで使用するための設定, D-2
- 概要, D-2
- 構成, D-3
- 使用するための Oracle コンポーネントの構成, D-3

### Java Virtual Machine (JVM)

- ローケルの設定, 1-10

### JDeveloper

- BI Beans のサポート対象バージョン, 1-8
- Oracle9i JDeveloper からの BI Beans プロジェクトの移行, B-1

## M

---

### Microsoft Excel

- Spreadsheet Add-In, 1-2
- Spreadsheet Add-In のサポート対象バージョン, 1-8

### Microsoft Windows

- 「Windows」を参照

## N

---

### NLS\_LANG 環境変数

- インストール後のグローバリゼーション・サポート, 2-4

## O

---

### Oracle Database

- BI Beans 用の設定, 2-6
- OracleBI Tools でのインストール, 1-9
- OracleBI Tools のサポート対象バージョンおよびパッチ, 1-7

### Oracle Reports Developer

- 概要, 1-3

### ORACLE\_HOME ディレクトリ

- 「Oracle ホーム・ディレクトリ」を参照

### OracleBI Beans

- 「BI Beans」を参照

OracleBI Discoverer Administrator  
「Discoverer Administrator」を参照

OracleBI Discoverer Desktop  
「Discoverer Desktop」を参照

OracleBI Spreadsheet Add-In  
「Spreadsheet Add-In」を参照, 1-2

OracleBI Tools  
OracleBI Tools およびコンポーネント, 1-2  
「OracleBI Tools のコンポーネント」も参照  
インストール後のスタート・ガイド, 2-11

OracleBI Tools のアンインストール, 3-2

OracleBI Tools のインストール  
OracleBI Tools のアンインストール, 3-2  
OracleBI Tools のインストール後のスタート・ガイド, 2-11  
OracleBI Tools の再インストール, 3-3  
Oracle ホーム・ディレクトリ、計画, 1-8  
インストール後の作業, 2-4  
インストールのトラブルシューティング, A-1  
インストールの前に, 1-1  
インストール要件, 1-1  
概要, 1-4

OracleBI Tools のコンポーネント  
アシスティブ・テクノロジー, 2-5  
インストール後の作業, 2-6  
開発者ロール, 1-4  
各コンポーネント, 1-2  
管理者ロール, 1-4  
コンポーネント実行時の表示言語, 2-4  
コンポーネントの起動, 2-8  
パワー・ユーザー・ロール, 1-4  
ビジネス・ユーザー・ロール, 1-4  
必要なメモリー, 1-5  
ユーザー・ロールごとに推奨される, 1-4

OracleBI Tools の再インストール, 3-3

OracleBI Warehouse Builder  
概要, 1-3

Oracle Universal Installer (OUI)  
「インストーラ」を参照

Oracle ホーム・ディレクトリ  
BI\_ORACLE\_HOME の指定, 2-2  
OracleBI Tools 用の指定, 2-2  
OracleBI Tools 用の選択, 1-8  
インストール要件, 1-8

## S

silentInstall.log, C-4

Spreadsheet Add-In  
インストール前の要件, 1-10  
概要, 1-2  
起動, 2-9  
ソフトウェア要件、Microsoft Excel, 1-8

sqlnet.ora ファイル  
更新, 2-4

## T

TMP サイズ  
インストール要件, 1-5

tnsnames.ora ファイル  
更新, 2-4

## W

Windows  
システム・ファイル, 1-12  
ソフトウェア要件, 1-6

## あ

アクセシビリティ・ソフトウェア、Java Access Bridge, D-1  
アシスティブ・テクノロジー  
OracleBI Tools のコンポーネントとともに実行するための使用, 2-5  
インストール時の Java Access Bridge, 1-10

## い

移行  
Oracle9i JDeveloper の BI Beans プロジェクト, B-1

インストーラ  
ユーザー・ロールおよび製品コンポーネント, 1-4

インストール  
Java Access Bridge, D-2  
Windows システム・ファイル, 1-12

インストール後, 2-4  
BI Beans の作業, 2-6  
Discoverer Administrator の作業, 2-6  
Discoverer Desktop の作業, 2-8  
OracleBI Tools のコンポーネントの作業, 2-6  
OracleBI Tools のスタート・ガイド, 2-11  
sqlnet.ora ファイル, 2-4  
tnsnames.ora ファイル, 2-4  
グローバリゼーション・サポート用の追加フォント, 2-5  
グローバリゼーション用の表示言語, 2-4

インストールの前に, 1-1  
「インストール要件」を参照

インストール前  
BI Beans の要件, 1-11  
Spreadsheet Add-In の要件, 1-10  
インストールの前に, 1-1  
コンポーネント固有の作業, 1-10

インストール要件  
BI Beans、の, 1-11  
Oracle ホーム・ディレクトリ, 1-8  
Spreadsheet Add-In、の, 1-10  
コンポーネント固有, 1-10  
ソフトウェア, 1-6  
ハードウェア, 1-5

## え

---

### エラー

- BI Beans の接続の問題, A-3
- windows システム・ファイル, 1-12
- コピーまたはリンクのエラー、トラブルシューティング, A-3

## お

---

### オペレーティング・システム

- Windows システム・ファイル, 1-12
- Windows のソフトウェア要件, 1-6
- ソフトウェア要件, 1-6

## か

---

### ガイド

- ユーザー・ドキュメントへのアクセス, 2-10
- 開発者ロール, 1-4
- 環境変数
  - グローバリゼーション・サポート用の NLS\_LANG, 2-4
- 管理者ロール, 1-4

## き

---

### 起動

- BI Beans, 2-9
- Discoverer Administrator, 2-9
- Discoverer Desktop, 2-10
- OracleBI Tools のコンポーネント, 2-8
- Spreadsheet Add-In, 2-9

## く

---

- グローバリゼーション・サポート
  - 追加フォント, 2-5

## け

---

### 言語

- OracleBI Tools のコンポーネントの実行, 2-4
- 動作環境ロケールの設定, 1-10

## こ

---

### コピー・エラー

- トラブルシューティング, A-3

## さ

---

- サイレント・インストール, C-2

## し

---

### 障害

- OracleBI Tools のコンポーネントを実行するためのアシスティブ・テクノロジー, 2-5

## す

---

### スワップ領域

- インストール要件, 1-5

## そ

---

### ソフトウェア要件

- BI Beans 用の JDeveloper, 1-8
- OracleBI Tools, 1-6
- OracleBI Tools 用の Oracle Database, 1-7
- Spreadsheet Add-In 用の Microsoft Excel, 1-8

## て

---

### ディスク容量

- インストール要件, 1-5

## と

---

### 動作環境

- ロケールの設定, 1-10

### ドキュメント

- ユーザー・ドキュメントへのアクセス, 2-10

### トラブルシューティング

- BI Beans の接続の問題, A-3
- OracleBI Tools のインストール, A-1
- コピーまたはリンクのエラー, A-3

## は

---

### ハードウェア要件

- OracleBI Tools, 1-5
- OracleBI Tools コンポーネント, 1-5
- パワー・ユーザー・ロール, 1-4

## ひ

---

### ビジネス・ユーザー・ロール, 1-4

### 非対話型インストール, C-1, C-2

- インストール前, C-2
- ログ・ファイル, C-4

### ビデオ

- インストール要件, 1-5

### 表示フォント

- グローバリゼーション・サポート用の追加フォント, 2-5

## ふ

---

### ファイル

- sqlnet.ora ファイル, 2-4
- tnsnames.ora ファイル, 2-4

### フォント

- 追加、グローバリゼーション・サポート用, 2-5

## へ

---

### ページファイル・サイズ

- インストール要件, 1-5

## ま

---

マニュアル

ユーザー・ドキュメントへのアクセス, 2-10

## め

---

メモリー

Discoverer Desktop、必要な, 1-5

OracleBI Tools のインストール要件, 1-5

各コンポーネントのインストール要件, 1-5

## ゆ

---

ユーザー・ドキュメント

アクセス, 2-10

## り

---

リンク・エラー

トラブルシューティング, A-3

## れ

---

レスポンス・ファイル, C-2

指定, C-4

## ろ

---

ロール

OracleBI Tools のインストール・プロファイル, 1-4

開発者ロール, 1-4

管理者ロール, 1-4

パワー・ユーザー・ロール, 1-4

ビジネス・ユーザー・ロール, 1-4

ログ・ファイル

非対話型インストールによる, C-4

ロケール

JVM ロケールの設定, 1-10